母の智―女であることについて―

（加納祐五先生の御講話を伺ふ会
および先生を囲む座談会の記録）

平成六年七月十日（日）午後一時三〇分より四時三〇分まで
東京都大田区立馬込文化センターにて開催

社団法人　国民文化研究会　刊

目次

第一部　加納祐五先生御講話
「母の智－女であることについて－」……一頁
第二部　加納祐五先生を囲む座談会……二五頁
校正を終へて（加納　祐五）……五七頁
編集後記（八木　秀次）……五八頁
付　記……六四頁
「国民文化研究会」版の発行に際して……六六頁

第一部　加納祐五先生御講話

『母の智―女であることについて―』

今日は、女性の方々が主として集まられるので、女性の道といふことについて話は出来ないかといふご依頼だったのですが、私はさういふ方面の話は余り得意ぢゃないので、ただ皆さんのお話の切つ掛けを作るといふ位のことで、これから話を進めて行きたいと思ひます。あとは私との問答でも宜しいですし、皆さんの間の問答でも宜しいですし、ご自由にお話をして頂ければ、と思ひます。少し資料を用意しましたが、これも一応読んで少々注釈を入れる位にして、あとはご質問なり、ご意見なりを承りたいと思ひます。

ここには主として河村幹雄先生の文章を載せました。先生は、九州帝国大学の先生で、昭和六年に四十六才で亡くなられてをりますので、私はお側で指導を受けたといふわけではありませんが、私どもが非常に多くのお教へを受けた方です。元来、ご専門は鉱山学とか、地質学といふ、自然科学者で、その上、非常に熱心なクリスチャンですが、非常に日本といふことを深く考へていらしゃった方です。ご専門は勿論ですが、教育といふことに

関しては本当に深く考へてをられて、九州では斯道塾（「この道」といふ意味の塾）を作つて学生を指導していらつしゃいました。教育の方面では相当名のある方でいらつしゃいます。その方の文章を沢山採りました。それから、あとはゲーテから少し言葉を採りました。

先づ最初の文章をご覧下さい。これは河村先生の『名も無き民のこゝろ』といふ本の中に収録されてゐる文章です。

『婦人の中に未来の人は眠れり。』人文の将来は婦人の中に潜めり。一民族に危害の及ばむとするに当たり幼と婦人とを護らむが為に壮年男子の挙りて死に赴くこと凡ゆる時代、凡ゆる民族を通じて易らず。之れ天の命なればなり。民族の運命、国民文化の将来、国家の前途を念慮とする者にとりて婦人程貴きはなし。然るに今日の女子教育を見よ、男子の教育に比して甚しく軽んぜらる。軽んぜらるゝは忍ぶべし。誤り教育せらるゝは忍ぶ可らず。婦人を誤り教育す。之れ民族を、人文を、未だ生ぜざるに

先だちて殺すなり。恐るべきもの之に過ぐるなし。何をか誤れる教育といふ。婦人教育理想の誤謬之れなり。婦人の個性を尊重せざる教育をなしつゝあること之なり。男子を偉なりとする卑屈根性を基として教育を計画実行しつゝある事、女子をして男子の後塵を拝せしめむとしつゝある事之なり。婦人の使命の神聖なる、天分の貴き、男子の企て及ばざるものあるを覚らざる無自覚之なり。

婦人の使命とは何ぞ。人文を過去より承継ぎ現在に拡ごらしめ将来に伝達すること之なり。即ち人文の精を身に体し、之を亡びしむることなく次代の人に譲渡すること之なり。即ち、未来の人文を委ねらるべき赤子を生み哺み育て教へ導くこと之なり。之を為さゞる限り婦人の教養は完からず。如何に修養に心懸くるも之れ畢竟自力作善の煩瑣聖道門、到底人格の完成せらるゝ望なし。唯一度嫁して妻となり子を産みて自ら母となり之が育成に心魂を捧げ尽す時、期せずして人格の完成せられ無礙融通自在なる境涯に入り、真の道自ら修せられむ。然るに現代女子教育は此最重大の一点を苟且に付しつゝあり。或は曰はむ『嗟、賢妻良母主義か、古し矣、三五年のみに非ず、一昔、二昔古し』と。新旧を言はむとに非ず。天は覆ひ、地は載す。雨露湿ほし天日は

温め、春夏秋冬輪転して動植物化育すること茲に幾千萬年。旧しとて天を如何、地を如何、風雨を如何、昼夜を如何、四時を如何、動植物を如何。余は唯真偽を問ふなり、道なりや外道なりやを問ふなり。正邪、善悪、美醜を問ふなり。人文百年の長計の為め如何なるか之れ正しき措置と問ふのみ。新旧は問ふ所に非ざるなり。現代に職業的不具者を目標とせずして広く人文の各分野の智識を授けむとしつゝある女子教育者なきに非ず。されど自己完成を究極の目的とし、之より一歩も進まむとせず、完成せる自己を家の為め子弟の為め捧げ尽すべきを教へず。誤れり。更に婦人たる自己の完成は己を家と子弟との為に捧げ尽したる時に於てのみ可能なるを教へざるなり。職業の如何を問はず男子は現在の為に戦ひ斃れつゝあるなり。婦人は之に身を守られつゝ生命と精神とを未来に伝ふる為に生き且つ悩むなり。誰か人生を喜劇といふ。偉大なる劇的作品の皆悲劇なるは何ぞ、人生は遂に悲劇たらざる能はざればなり。父は国の為に死し、母は家の為に死す。之れ人生の真趣なり。

『一粒の麦地に落ちて朽ちずば只一粒にてあるべし』

（河村幹雄『名も無き民のこゝろ』より）

少し注釈を加へてみませう。

「婦人の中に未来の人は眠れり。」未来の人といふのは婦人の中に籠つてゐる。

「人文の将来は婦人の中に潜めり。」文化の将来は婦人の中に籠められてゐる。

「一民族に危害の及ばむとするに当たり幼と婦人とを護らむが為に壮年男子の挙りて死に赴くこと凡ゆる時代、凡ゆる民族を通じて易らず。之れ天の命なればなり。民族の運命、国民文化の将来、国家の前途を念慮とする者にとりて婦人程貴きはなし。然るに今日の女子教育を見よ、」これは大正から昭和にかけての頃の事をおしゃってゐるわけですが、「男子の教育に比して甚しく軽んぜらる。軽んぜらるゝは忍ぶべし。」軽んぜられるといふことは我慢するとしても、「誤り教育せらるゝは忍ぶ可らず。」間違つた教育をされてゐるといふことには黙つてゐられない。

「婦人を誤り教育す。之れ民族を、人文を、未だ生ぜざるに先だちて殺すなり。」婦人の教育が誤つてゐるといふことは民族と文化の将来をまだ芽が出ないうちに殺してしまふことではないか。

「恐るべきもの之に過ぐるなし。何をか誤れる教育といふ。」ぢゃあ、どこが間違つてゐ

るのかと言ふと、「婦人教育理想の誤謬之れなり。」理想それ自体が誤つてゐる。

「婦人の個性を尊重せざる教育をなしつゝあること之なり。」今の教育は、婦人の個性といふものを尊重してゐない。

「男子を偉なりとする卑屈根性を基として教育を計画実行しつゝある事、女子をして男子の後塵を拝せしめむとしつゝある事之なり。婦人の使命の神聖なる、天分の貴き、男子の企て及ばざるものあるを覚らざる無自覚之なり。」男が偉いといふ先入的な観念で男子の後を追ふやうな卑屈根性が今の女子教育である。それで女の本質を忘れて男の後ばかりを追つてゐるといふのが今の婦人の教育である。

「婦人の使命とは何ぞ。人文を過去より承継ぎ現在に拡ごらしめ将来に伝達すること之なり。」婦人の使命とは文化の伝達者であるといふことである。

「即ち人文の精を身に体し、之を亡びしむることなく次代の人に譲渡すること之なり。即ち、未来の人文を委ねらるべき赤子を生み哺み育て教へ導くこと之なり。」自分の子供が将来の文化を担つて行くんだからそれを哺み育てるのが婦人の務めではないか。

「之を為さゞる限り婦人の教養は完からず。如何に修養に心懸くるも之れ畢竟自力作善の煩瑣聖道門、到底人格の完成せらるゝ望なし。」自力作善の煩瑣聖道門とは他から切り離

された個人人格だけを目標にして抽象的な徳目を一所懸命励むといふことでせうか。狭い自分の頭だけで色々考へて道徳的にならうといふことです。河村先生はじめ私どもは、さういふことよりも、他の人と一緒に生きるといふことを先づ考へて、人と協力して生きる、そこに生まれる生まれながらの心を心として生きる、さういふやうなことのうちに自ら道といふものは出来て行くんだといふのが私どもの大体の考へ方ですから、個人を基にしてその上に道徳を打ち立てようといふやうなことは余り考へないといふのが私どもの考へなのです。ですから、共に生きることを基にしなくては到底人格の完成せらるる望みはないといふのです。

「唯一度嫁して妻となり子を産みて自ら母となり之が育成に心魂を捧げ尽くす時、期せずして人格の完成せられ無礙融通自在なる境涯に入り、真の道自ら修せられむ。」母となつて、自然の摂理に従つて子を哺み育てれば、上辺だけの徳目に煩はされることなく、自ら人格といふものは完成せられるのだ。かういふことでせう。

「然るに現代女子教育は此最重大の一点を苟且に付しつゝあり。」ないがしろにしてゐる。

「或は曰む『嗟、賢妻良母主義か、古し矣、三五年のみに非ず、一昔、二昔古し』と。」かういふやうなことといふと、世の人は何だ良妻賢母主義ぢゃないか、もう古い、三年や五

年ばかりぢゃない、十年も二十年も古いと、かういふかも知れない。しかし自分は「新旧を言はむとに非ず。」新しい古いを問題とはしない。

「天は覆ひ、地は載す。雨露湿ほし天日は温め、春夏秋冬輪転して動植物化育すること茲に幾千萬年。旧しとて天を如何、地を如何、風雨を如何、昼夜を如何、四時を如何、動植物を如何。余は唯真僞を問ふなり、道なりや外道なりやを問ふなり。正邪、善悪、美醜を問ふなり、人文百年の長計の為め如何なるか之れ正しき措置と問ふのみ。新旧は問ふ所に非ざるなり。」お前は古い古いといふ人もあるだらうが、自分は別にそんな新旧といふことに関はってゐるのではない。「天は覆ひ、地は載す。…」とあるのは、何千年の自然の営みといふことですが、さういふものは古い新しいの問題ではないではないか。否定しようとして否定されるものではない。さういふ天の道に沿ってゐるかどうかといふこと、それが真偽の別れ目だけれども、さういふ幾千年の道に沿ってゐるかどうかといふことが自分の問題なのだ。

「現代に職業的不具者を目標とせずして広く人文の各分野の智識を授けむとしつゝある女子教育者なきに非ず。」職業的不具者、つまり職業的な知識ばかりを得て一般的な常識がないといふやうな不具者を育てるのではなくて、各分野の知識を授けようとしてゐる女子

教育者もないではないことは知つてゐる。

「されど自己完成を究極の目的とし、之より一歩も進まむとせず、完成せる自己を家の為め子弟の為め捧げ尽すべきを教へず、誤れり。更に婦人たる自己の完成は己を家と子弟との為に捧げ尽したる時に於てのみ可能なるを教へざるなり。職業の如何を問はず男子は現在の為に戦ひ斃れつゝあるなり。婦人は之に身を守られつゝ生命と精神とを未来に伝ふる為に生き且つ悩むなり。誰か人生を喜劇といふ。偉大なる劇的作品の皆悲劇なるは何ぞ、人生は遂に悲劇たらざる能はざればなり。父は国の為に死し、母は家の為に死す。之れ人生の真趣なり。」人生といふものはさういふものである。

最後は聖書の言葉です。『一粒の麦地に落ちて朽ちずば只一粒にてあるべし』

聖書には続いて『若し朽ちなば、多くの実を結ぶべし』とあります。一粒の麦は地面に落ちることがなければ、いつでももとのままの一粒であるに過ぎないが、若し天地自然の法則に従つて地中に落ちれば、その種麦は朽ちて姿は無くなつても、それによつて新しい若芽を伸ばし、果ては多くの実を結ぶことになるのだ、といふことです。

以上が河村先生の、婦人といふものはどういふものか、本来どういふ務めを背負つてゐるものか、それを生かすためにはどうなければならないか、といふことについて、そのお

考へを簡潔に書かれたものだと思ひます。

次も河村先生の遺稿から採りました。日本の歴史に於いて婦人が努めたことはどんなことだつたのかといふことの一つの例を言つてをられます。

日本語を生命あらしめて今日に伝ふる上に婦人の努めた役目は偉大である。漢語が一少くも漢字が男子の用語を甚しく浸潤して来た時代に於て日本婦人は国語を以て文を綴り芸術的表現をなし之を以て日本語の外国化せらるる事を防いで呉れた。フィヒテに依て悪例として挙げられたローマ化せるゲルマン人の運命を我国から除き得たのは婦人の力大いに与づて居るとして宜しい。現代日本の女性にも亦此の任務が加へられてゐる。漢文は之を読む時、国語訓みとして居た過去に於けると異なり外国語を外国流に発音し得る様に学びつつある今日、一国語のみならず、英、仏、独、露多数の国語を此様に学ばむとしつつある今日に於ては、日本語を外国語に屈従せしめざる努力の必要は過去に幾層倍する。現代の日本婦人をして此国民的緊急事に眼を開かしめ此貴き貢献を国民に捧ぐる事に熱心せしめねばならぬ。

（『河村幹雄博士遺稿』より）

これは平安時代のことを言つてをられるのです。当時は男の世界といふのは全く漢文の世界だつたのです。政治の世界など公の世界は全てが漢文で行はれてゐた時代です。その時代に国語を本当に守つて来たのが女性である。かういふことを言つてゐるのです。

源氏物語はじめ色々な物語が女性の手によつて書かれた。これは本当に日本語で以て書かれたものです。さういふことが男の世界がどんどん漢語化されて行つてゐた時代の中で日本語が外国語化されるのを防いでくれた。それが日本人としての気持ちを守つて来た基礎になつてゐるのですが、そこには非常に婦人の力があつたのだといふことです。

現在もその当時と同じく外からどんどん外国語が入つて来るわけです。当時は漢語を日本読みにするといふことをしたのだけれども、今は外国語を外国語として発音するまでして学んでゐる。さういふことからいふと日本語を守らなければならないといふことは当時より幾層倍難しいこと、大切なことなのだ。だからさういふことに気を付けてくれ。かういふことをおつしやつてゐるのです。

その次に和歌を載せましたが、これは小林秀雄先生の『本居宣長（もとをりのりなが）』という本の中に出て

来るもので、平安時代の大江匡衡と赤染衛門といふご夫婦の和歌です。

はかなくも思ひけるかな乳もなくて博士の家の乳母せむとは　（大江匡衡）
さもあらばあれ大和心しかしこくば細乳につけてあらすばかりぞ　（赤染衛門）

今述べましたやうに、平安時代には男の世界は漢語にどんどん侵されてゐましたが、さういふ時に女が日本語を守つた、つまり日本の心を守つたわけです。そのことに小林先生も触れられてゐるのですが、そこのところに出て来る歌をここに取り上げました。

大江匡衡といふのは当時の文章（もんじやう）博士といふ、公の学校の先生で、詩や文章や歴史を教へてをられた方です。ですから漢語の世界に生きてをられるわけです。その奥様が赤染衛門といふ方で、そのお二人の間にお子さんが生まれたのです。それで乳母を雇つた。ところがその乳母が余りお乳がよく出ない。そこでご主人の大江匡衡がかういふ和歌を詠んだのです。

「はかなくも思ひけるかな乳もなくて博士の家の乳母せむとは」

「乳（ち）もない」といふのは、乳が出ないといふことです。お乳も出ないのに乳母をするのはをかしい。この乳（ち）といふのは知恵の知（ち）にも掛けてゐます。理性といふか、知識といふことにも掛けて、乳（ち）と言つてゐるのです。だから、博士のうちに乳母に来るのに知識もない、お乳もないと、両方言つてゐるわけです。さういふ人を乳母に雇つたのはどんなものかねと、かういふ歌を作つたのです。

ところが夫人の赤染衛門が次の歌を作つた。

「さもあらばあれ大和心しかしこくば細乳につけてあらすばかりぞ」

この大和心とは一体何かといふと、今は大和心といふとだいぶ違つた意味になつてゐて、勇ましいとかいさぎよいといふやうな感じを受けるわけですが、当時の大和心といふのは、本来の日本の心といふ意味です。ここに「乳（ち）もなくて」、知識がなくて、と言つてゐるやうに、知識に対して考へられてゐるわけです。学ぶ知識といふものではなくて、生まれながらに持つてゐる生きる知恵といふか、日常生活の知恵、日常生活を送つて行く上ので知恵、だから知識といふよりはむしろ情意的なものです。外から入つて来る知識ではなくて、自ら生まれて来る知恵、生活の知恵、さういふものが大和心です。

「大和心しかしこくば」、さういふ生きた知恵さへ持つてゐる人ならば一向に差し支へ

ないではありませんか。かういふ歌を夫人は詠まれた。

そこのところが河村先生の言はれたこととピッタリしてゐるわけです。当時も男の世界、政治の世界、公の世界といふものは、漢語に侵されてゐたけれど、さういふ中で家庭生活のうちに本当の生きる知恵といふものを守つて来たのは女性であつたといふことなのです。それがこの和歌の遣り取りによく出てゐるのではないかと思ひます。

次も河村先生の文章です。これは昭和五年に教育勅語奉戴四十周年の記念があつて、それの記念講演を熊本でされたものの記録です。従つて教育勅語について話されたものです。

何故我々は此の聖旨（教育勅語）を戴く事が出来なかつたといふ事を反省してみなければならぬ。反省してみると理由は沢山あります。一つ陥り易い間違ひを私は認める。それは忠孝勇和勤倹といふ此の徳目をずつと並べて御示しを戴いた様に思つて居りますが、之がいけない。徳目は神（かむ）ながらの本源をお示しあつたのに、末々（すゑずゑ）ばかりにとらはれさうして雑念雑種の疲労困憊（こんぱい）に陥つて居り、之が一つの原因であります。もう一つは道は卑近である。それを高遠なものに見て実行した。即ち

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道

といふ事が明治天皇の御製の中にもあります。（中略）勅語を戴いて見ますと、はつきりと斯の道と宣べておいでになり、明かに総べてを収めて居り、「斯の道は」といふのは皇祖皇宗の遺訓であるとお指し示しになり、爾等祖先の遺風を顕彰する所以であると言つて居られる。然るに我等祖先のふみ来つたもの、それを忘れて居り、道は高遠なものと思つてゐるのでありますが道は決して高遠なものではない、我々の間に自然に備はつたものであります。我々はそれによりすがつてゆけばよい。日本の道は親子の道であります。一口に申せば親子の道であります。之を親しく一家の中に取り入れ、一家睦じく暮すといふ事が基礎であります。

（『河村幹雄博士遺稿』より）

四十年も経つて、今更、教育勅語云々といふのはをかしいではないか。四十年ずつとその御趣旨を守つて来たら、今更四十年目にどうかういふ必要はないのではないか。なぜかういふことになつたんだ。かういふことを言はれるわけです。

「何故我々は此の聖旨（教育勅語）を戴く事が出来なかつたといふ事を反省してみなけれ

ばならぬ。反省してみると理由は沢山あります。一つ陥り易い間違ひを私は認める。それは忠孝勇和勤倹といふ此の徳目をずつと並べて御示しを戴いた様に思って居りますが、之がいけない。徳目は神ながらの本源をお示しあつたのに、末々ばかりにとらはれさうして雑念雑種の疲労困憊に陥つて居り、之が一つの原因であります。」

忠も孝も教育勅語ではおつしゃつていらつしゃるけれども、それは徳目をただ並べたのではない。その根源になるものをお示しがあつたのにそれを忘れて個々の末々の道徳的な徳目ばかりを問題にして来たから、かういふことになつてしまつたのだ。根本を忘れて末々の、忠はどう、孝はどう、かうでなければいけない、ああでなければいけない、ああせよ、かうせよ、といふことをうるさく言ふ。さういふことばかりして来たから、かういふことになつたのだ。もっと根本をハッキリしなければいけません。かういふことです。徳目ばかりを言つてもうくたびれてしまつてゐるといふことです。根本を忘れてしまつたといふことがかういふことになつた一つの原因であるといふことです。前にも申しました、自力作善の煩瑣聖道門といふことでせう。

「もう一つは道は卑近である。それを高遠なものに見て実行した。」

道はもつと身近にある。それをはるか高いものに考へて難しいことばかり言つて来た。

それだからみんなシックリいかないのだ。明治天皇の教へがはつきり胸に落ちないのだ。かういふことをおつしやつてゐるのです。

「白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道

といふ事が明治天皇の御製の中にもあります。」

お歌の意味は、日本の我々の道といふものは、そんな遠いところにあるのではありません。ただ人のまことの道、まごころの道だけですといふことです。

「（中略）勅語を戴いて見ますと、はつきりと斯の道と宣べておいでになり、明かに総べてを収めて居り、『斯の道は』といふのは皇祖皇宗の遺訓であるとお指し示しになり、爾等祖先の遺風を顕彰する所以であると言つて居られる。然るに我等祖先のふみ来つたもの、それを忘れて居り、道は高遠なものと思つてゐるのでありますが道は決して高遠なものではない、我々の間に自然に備はつたものであります。」

「斯の道」といふ祖先の遺訓といふものはやかましい徳目をあれこれ並べるやうなことではない。自然に備はつたまごころというものを踏み行ふことに外ならない。それは高遠なことではなくて非常に身近なことである。かういふことを言つていらつしゃるわけです。

「我々はそれによりすがつてゆけばよい。日本の道は親子の道であります。一口に申せば

親子の道であります。之を親しく一家の中に取り入れ、一家睦じく暮すといふ事が基礎であります。」

これが本当に近い道だ。我々に自然に備はつた道だ。さういふことを心得てゐれば自ら孝も忠も、そこに出て来るのであつて、孝はかうあらなければならない、忠はかうあらなければならないといふやうなくどくどしい教へといふものはなくてもいいのではないか。さういふものはただ理屈として押し付けたら、やはり皆、遠い世界のものとなり、なかなか踏み行なふことは難しい。かういふことをおつしゃつてゐるのだと思ひます。

そこで家庭といふことになりますが、これが日本のおほもとにあつて、それを本当に美しく育てることを第一に心掛ければ、それが自ら色々の道徳の基礎になる。それが我々の祖先が伝へた道といふものではないか。かういふことを河村先生は言つていらつしゃるのだと私は思ふのです。

ここから二つはゲーテの文章から採つたものです。先づ、一つめの文章ですが、ここにいらつしゃる八木（旧姓橋本）加枝さんが結婚なさつた時にこの文章を差し上げたことがありました。といふのも、家庭に入られれば先づは日常の些事といふものに従事されるわ

けですが、それは大変なものです。我々男が、気楽にと言ってはもちろん語弊がありますが、天下、国家を論じてゐるやうなわけにはいかないのです。朝から晩まで大変なわけです、家庭の仕事といふのは。だけど、それが本当は大切なのだといふことがこの文章によく書かれてゐると思つたのです。『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の中に出て来る文章です。

男子は、婦人の占め得る最高の地位に婦人をおかうとしてゐます。家庭の支配といふことより高い地位がありますか。男は外的の事情に悩まされ、財産を作り、これを守らなければなりません。その上、国務に関与したり、至る処で周囲の事情に左右されます。私に言はせれば、男は支配してゐるつもりで何も支配せず、理性的であらうと欲して、常にひたすら政略的にならざるをえず、公明であらうとして、隠しだてをし、正直であらうとして、うそをつかざるを得ないのです。達しられない目的のために、自己との調和といふ最も美しい目的を常に放棄しなければならないのです。これに反し、分別ある主婦は内部において実際に支配し家族全体にあらゆる活動と満足とを可能にします。われわれが正しく善いと考へることを実行し、目的に対する手段を

実際に支配する以外に、人間の最高の幸福がありますか。そしてわれわれの最も手近な目的は、家庭の内部をおいてどこにあるべきでせう？また、あり得るでせう？

ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』より）

次もゲーテの文章で、『ヘルマンとドロテーア』といふ恋愛の長い詩編ですが、これも非常にいいものです。私はこれが大好きで、かういふ詩ですので翻訳では味が出ないから原文で読みたいと思つたのですが、私は第二外国語はフランス語で、ドイツ語は全然わからないのです。だけど何とか読まうと思つて自学自習したのですが、駄目でした。

女といふものはその本分通り早くから仕へることを習ふがよいのです。
仕へることによって初めてやがて治めることが、
また家の中で分相応の力を持つことが、できるやうになるのです。
女兄弟は早くから男兄弟に仕へ、両親に仕へます。
女の一生といふものは、年中絶え間なく行つたり来たり、

あげたり運んだり、他の人のために支度したり間に合はせたりするものです。

（ゲーテ『ヘルマンとドロテーア』より）

これをどういふふうに受け取られるでせうか。随分に男女差別だなとか、さういふふうにもお取りになるのではないかとは思ふのですが、まあ、文字通りの意味としてそのままお読みになつて下さい。

女は仕へるものだと言ひますが、それでは男はどうなんだ、男は仕へられるばかりなのか、かういふのは差別ではないか、かういふふうにもお考へになるでせう。でもさうではないのです。

最後はまた河村幹雄先生の文章です。

「汝等（なんぢら）の中、大ならんとするものは他の僕（しもべ）となるべし」と基督（きりすと）は教へ給うた。「我」のない人、ｓｅｒｖｅする人、親心の人が善い人であり、偉い人である。然らば修養する道は唯一つ、己の手足の及ぶ所から始めて人に仕へる事である。

（『河村幹雄博士遺稿』より）

これは別に女のことを言つてゐるわけではないのです。人間とは本来かういふものだといふことを言つてゐるのです。ですから、前のところで、女といふものはその本分通り早く仕へることを習ふのがよいといふことが出て来ましたが、それは女ばかりが仕へることが大切だと言つてゐるわけではないのです。人間といふものは全て、仕へるといふことが本来の道だ、といふことを、河村先生は聖書の言葉を引いて言つてをられるのです。男だつてやつぱり仕へるものなのです。本来さうなのだといふことを言つてをられるのでして、これは決して女を差別してゐるわけではないのです。お互ひに仕へ、仕へられる、そこに人生の深い味はひがあるのではないでせうか。

私が用意して来た資料はこれだけなのですが、今まで飛び飛びにお話して来たことの中で私の言ひたいことはこんなことなのかなあといふことは多少判つて頂けたのではないかと思ひます。あとは今の話を中心にしてでも宜しいですし、他のことでも結構ですから色々お話を出して頂ければ結構だと思ひます。

これまでにお話したやうに、道といふのは非常に身近なものだといふことが本当に大切なことだと私は思ふのです。遠いところのものを議論することではないと思ひます。やはり自分の体で体得しないといけないといふこと、私自身もなかなかそんなことは出来ませんけれども、そのやうに努力するといふことが大切なのではないでせうか。国民文化研究会の長内俊平先生がよく言はれることですが、〝日本精神とは何かと聞かれたら、恥かしながら私を見て下さい、といふしかない〟と、かういふことを言はれるのですが、ちょつと聞くと随分傲慢な言ひ方だなあといふ気もするでせう。日本精神を知りたいなら、俺を見よと、かういふことですから。なんだ随分偉ぶつてゐるなあと、かういふふうにもとられる。しかし、さうぢゃないんです。日本精神なぞといふものは言葉で書けないものだといふことなのです。言葉で色々説明したところで、それは説明に過ぎないのであつて、やはりそれを生き生きと見せるのはそれぞれの人の行動でしかないわけです。さういふ意味で自分を見てくれと、かういふ意味なのです。さうすると、これは本当は非常に謙虚なことなのです。さういふふうに自分を修養しなければいけないわけですから。自分の日常の振る舞ひを見て、〝ああなかなかいいところあるなあ〟と、かういふふうに人を思はせる

やうでないと、ただ口で〝日本精神はかうです〟と言つても、人はなかなか理解しないといふことではないかと私は思ふのです。だから人間の姿といふものは大切です。見ただけで人柄がわかるといふのですから怖いものです。理屈といふのは人真似で言へるわけです、覚えてしまへば。だけど自分で実際に体現するといふことはさうやさしいことではないと思ひます。だからやはり、人を感化するなぞといふと言葉が悪いのですが、人に気持ちを判つてもらふといふのは言葉ではなくて、体なのでせう。日常の行動といふことが一番大切なのではないかと思ひます。もちろん言葉も大切ですけれども。（終り）

第二部　加納祐五先生を囲む座談会

［出席者］

加納祐五（㈳国民文化研究会監事、元・日特金属工業株式会社常務取締役）
関口靖枝（主婦、元・高校教諭）
山内恭子（主婦）
古閑恭子（主婦）
北林幹雄（団体職員）
八木秀次（大学講師）
北林尚子（主婦、生後七ヶ月の男児の母）
中澤美津子（主婦、生後八ヶ月の女児の母）
丹羽冬紀子（会社員）
八木加枝（主婦、生後十ヶ月の男児の母）
古閑倫子（大学一年生）

（八木加枝） 最近のマスコミの報道を見てゐると、今の女子大生や女子高生が、生活やものの考へ方の面で、昔ではとても考へられなかつた位に、道徳的に乱れてゐるなあと思ふやうなことが次々に伝へられてゐて、彼女たちは女性の役割といふものをどういふふうに考へてゐるのかなあと思ふと、同じ女性として悲しく思ふことが多いんです。

また、世の中が変化したのか、女は結婚しても外で働くことが当たり前のやうになつて来て、主婦となつて家にゐることは世の中から取り残されてゐるやうな気がするといふ人の話も聞いたりします。私はそれは違ふのぢゃないのかなあといふふうに思つてゐるのですが、それにしても家庭を守り、夫や子供の世話をするといふ昔から女性がして来たことがまるで能力のない女性のすることだといふやうな風潮が強くて、もう今の世の中では家庭といふ場が女性が誇りをもつて生きられる場ではなくなつて来てゐるのかなあといふ気

が近頃して仕方なかつたんです。それで私が結婚する前に加納先生がおつしゃつて下さつた言葉が随分思ひ出されて来て励みになつてゐたのですが。

（**加納**）やはり世の中の仕組みといふものが昔とは随分変はつて来てゐるのですね。これは好むと好まざるとにかかはらず変はつて来てゐるのです、我々の生活といふのは。だから私が今のやうな話をしても女の人は家を守るのが本則だといふことは動かせないことだとは思ひますが、かといつて、女性が外に行つて働くのが間違ひだとは言ひ切れませんよね、やはり今は。それはさういふ必要もあるのでせうから外へ行つて働くのは変だといふふうには考へません。ですから大切なのは基本的な考へ方ではないのでせうか。

家庭にゐたら遅れるだとか、外にゐれば進歩するだとかといふ、さういふ基本的な考へ方から出発したら間違ひなのです。外で働いてゐたつて家庭を重んじることは大変かも知れないけれど出来ないことではないでせう。だから基本的な考へ方をしつかりして置くことが大切だと思ひます。世の中といふのは本当に変はるものです。この変はり方が私は良い方に変はつてゐるとは必ずしも思ひませんが、しかしそれを逆転するといふこともなかなか難しいことではないでせうか。

昔は今のやうにこんなに何でも経済第一ではありませんでしたが、この頃では世の中の仕組みといふものがみな経済第一といふことになつてしまつてゐます。これはあまり良いことではないと思ふけれどもさうなつてゐます、近代生活といふものは。それにどんどん疑問なく流されて行くといふことが困るのです。かう行くのが進歩だとか、さう一概に思つてどんどんそつちの方向に進んで行く、これが時代の流れだと言つて決めて行く、かういふ考へ方が大変問題だと思ひます。でもそれを無理やりに昔の型に納めようとしても納まらないのです。

（**関口**）さういふ時代の流れは確かにあるでせうが、河村先生のやうに自信を持つて、例へば「婦人の中に未来の人は眠れり」とおつしゃつて頂ければ、かういふ言葉だけでも大いに女の人は勇気づけられる。尊さに目覚める言葉だと思ふのです。それから、未来の人へ人文を伝へる、哺み育て導いて伝へることが、それをしない限り「婦人の教養は完から

ず」とまで言ひ切つていらつしゃるでせう。また終はりの方には、さういふことを捧げ尽くした時に於いてのみ婦人の自己完成がなるんだとはつきり自信を持つて言ひ切つていらつしゃいますよね。これだけのことを今、女に向かつて言つてくれる人がゐない。女性の中にもゐないし、男性の中にもゐない。「これが女の人の本質なのですよ」といふことをしつかり言へば、あとは状況に応じて働いてもいいし、家庭に入つてもよい。

（加納） 基礎をしつかりつかめればそれはそれでいいと思ひます。

（関口） これを読みまして、その当時の女子教育ですら、やはり河村先生が考へられるやうではなかつたのだなあと思ひました。

（加納） だいたい明治以来の教育が間違つてしまつた。

（関口） 聞くところによると、河村先生は学校教育に失望なさつたのか、お嬢さん方を学校に遣られなかつたさうですね。

（加納） ええ、お嬢さんを、学校に出さなかつた。家庭で教育された。そこまで徹底されたのです。

（関口） 河村先生のおつしゃつてゐるやうな言葉を聞いたら、女の人たちは〝ああ、女に生まれて良かつたな〟といふ気持ちが芽生えると思ふんです。

（加納） だけど、女の方がさういふ気持ちになつても受け取る男の方がやはり駄目なのも多い、自分のことは棚に上げてのことだけど。女に言はせると男がだらしないからといふんでせう。（一同笑ひ）

（関口） 赤染衛門の歌と大江匡衡の歌を読んで、ああこの時代もやはり女の人の方が優れてゐたのかなあと思ひました。歌の出来が全然違ひますね。

（加納） ええ、今と同じですね。

（関口） やはり日本の国は女性で支へられてゐたのかなあと思ひますね。

（加納） さう言はれると少し…。（一同笑ひ）

（加納） 私どものやつてゐる運動（国民文化研究会の活動）は何かといふと、やはり心を大切にするといふことです。一番は心です。それがなくて色々道徳的な説教をしたつて、そんなものは耳に入りません。だから河村先生がよく言はれるのだけれど、色々話をしたあとでその最後にモラルをくつつけては駄目になつてしまふんです。「修身」にはさういふものが多いでせう。最後にモラルをくつつけたら全体が駄目になつてしまふ。

これは福田恆存さんが言つてゐることだけれど、自分も小さい時から「修身」の授業を受けて来た。それはつまらないものだとは思はなかつた。結構おもしろく聞いた、と、かう言ふんです。でもそれは、例へばワシントンが桜の樹を切つて正直に答へたといふ話があるでせう。さうしたらお父さんに大変誉められたといふ話がありますね。それはいいんですが、だから正直が大切だ、と最後に来たら駄目だと、かう言ふんです。自分はそれはドラマとして非常におもしろい、感動するといふわけです。自分はお父さんの大事にしてゐる桜の樹を切つてしまつたけれど、ああこれは言つたらいいのかな、隠した方がいいのかな、と心の中で争ふわけです。そしてとうとう正直に言ふんでせう。そのドラマが非常に自分の気持ちに来るといふわけです。親が誉めてくれたから、だから正直はいいんです、と、かうなつたら駄目だといふわけです。正直にしてゐたら誉めてもらへるだらう、と、かうなつたら、正直といふものは駄目になつてしまふ。誉めてもらふための正直ではないんですね。さういふふうになつたら駄目になつてしまふ。「修身」でさう聞いたなあ、正直に言つたら誉めてもらへるんだと、そして自分がやつたら親父に叱られちゃつた。かういふことになると、なあんだ、と、かういふことになつてしまふわけです。

だからやはりそこの現場に於ける個々の具体的な心の動きといふものをこつちに受けとめるといふことが大切ですね。ワシントンがこれはどうしたらいいだらうと思つて、考へた挙句に正直に言つたといふ、そこの心の戦ひが大変大切なところで、誉められたといふことは何でもないことです。その時に叱られたつていいんです。叱られたから正直に言ふのはやつぱり間違つてゐたなんていふことではないんでせう。正直に言つたら叱られた、だから正直なんてものはつまらないことだと、かういふことではない。だからやはり日常

の動作が自然に人を感化するといふのが一番理想的なわけです。まあ、それはむづかしいことですが。

（**北林尚子**）私、子供を持ちまして、今は塾が流行つてゐますから、この子をどういふ塾に入れようかだとか、教育を他人に任せてしまふといふか、自分の姿勢を見せるといふのではなく、結果を貰はうといふか、過程ではなくて出来上がつたものを如何に教へて貰はうかなといふふうに、具体的なことは考へてゐなかつたんですが、どこの塾に入れようかとか、さういふことを考へてゐたんです。でもさうぢゃないんだなあといふことを今日のお話を聞かせて頂いてゐて思ひました。どういふ子供に育つてほしいかといふことは、親が教へなければいけないんだなあと思ひました。

知識の知といふものではなくて、生活の知といふものを子供に自分なりに教へて行かなければいけないんだなあと。塾とかいふ前に自分がどういふふうな子供になつてほしいかとか、自分が育つて来た中で自分の親に対してこれを貰つて有難かつたなあといふものを、子供に伝へて行かなければいけないんだなあと、本当にこれが基本的なことなんだなあといふことを今日教へて頂いたやうで、良かつたなあといふ気がします。

（**加納**）私自身だつて自分の子供には、良い学校を出てもらつて、良いところに勤めてもらつて、なんてことをやはり考へますよ。それはそれで間違ひであるとも言ひ切れませんでせう。その理屈は判りますけれども、なかなかそれに徹せられませんね。だけど、それはそれとして、本当はそれよりもつと大切なことがあるんだといふことを忘れないでゐることが大切なんだと思ひますね。

（**関口**）本当にさうですね。その大切なものといふのは三つ四つまでの間にお母さんがしつかり植ゑつけないことには芽生えて来ないものだと思ふんですね。しかしそこを疎かにしたからといつて特別おかしな子になるかといふと決して見かけは変はらない。頭が良くて聞きわけが良くて。でも何かに出会つた時に判断が狂つて来ると思ふし、人の心の痛みとか、人への思ひやりが、育つてゐないとか、どこかで大きくなつた時に欠陥が出て来る。

だから今おつしゃつたやうに本当に一番大事なことは何かといふことだと思ひます。いはゆる知識だとか、知能指数的なものはいくらでもあとで出来るものです。ここで言はれてゐる大和心、さういふものを子供の心の中にしつかり芽生えさせて、それを育てるといふのはお母さんの大事な役目だと思ふ。どちらかといふと、お父さんは自覚してゐても一緒にゐる時間が少ないですからね。さういふことといふのは、さあ、それでは、これから大和心を育てませう、といつてできるやうなことではないでせう。咄嗟の判断だとか、人と出会つた時の態度だとか、さういふお母さんの何気ない仕草の中から子供はちゃんと見て、吸収してゐると思ふんです。

（**加納**）さういふ育て方をしたからといつて、知識の習得が出来なくなるなんてことはないと思ひますよ。却つて良く出来るのぢゃありませんか。

（**関口**）人の心として一番大事なことですものね。

（**加納**）それがいいんぢゃあないでせうかねえ。

（**関口**）おそらく若いお母さん方は、その辺のことが良く自覚できないままに二、三年経つて、もう塾に遣らなくてはならない歳になつて、といふふうに考へてしまふのでせう。今、世の中がものすごい勢ひで流れてゐるので、さういふふうになつてゐるケースが多いのぢゃないかなあと思ひます。今日、先生がお話しになつたことといふのは、私たちは今この同じ場にゐるから良く判るけど、一般には何か判つたやうな判らないやうなもので、今の新聞を始めとするマスコミでは取り上げにくい内容ですよね。だからほとんど報道されない。マスコミは幼児教室や早期教育といふことは言ふけれど、かういふことはあまり言はない。これは欠落してゐる大事な部分ではないでせうか。だから私は国民文化研究会の合宿教室に女子学生が沢山来て、そして加納先生のお話や長内先生のお話を聞いて、あさういふことなのか、お母さんになるといふのは大事なことなんだなあと自覚してくれたらいいなといつも思ふんです。

（**加納**）今は何でも理論といふか理屈が先立つて、教育でも色々な教育理論みたいなものになつてしまひましたね。さういふものは非常に部分的なものですから部分的にはさうい

ふものも良いのだとは思ひますが、全体が問題ですね。しかし今は世の中全体がさういふふうにずうつと流れてゐるから、これはなかなか大変です。だけどだんだんさういふことにも気が付いて来るのではないでせうか。駄目かな？

（**八木加枝**）今日、先生のお話を伺ふといふことで、事前に少し準備をしようと思つて、岡潔先生の本を読んでゐたんです。その中に、日本的情緒といふものを人の生き方といふか、心の中に芽生えさせて行くには十万年かかると書いてあつて、今は随分と日本的情緒といふものもなくなつて来たなあと思ひまして、それが蘇へるにはまた十万年かかるのかと思ふとがつかりするんですが、でもがつかりしてばかりゐたんぢゃいけないんだなあと思ひました。

（**加納**）基本的にはもつと素直になればいいんです、本当は。それだけなんだけれどそれがなれないんだなあ。考へてみれば普通のことなんですもの、常識的なことなんですよ。今はもうとにかく理屈といふのかなあ、さういふものがどんどん先に立つて行くからね。ここで言へば、赤染衛門が詠んだやうな大和心といふものが働く余地がないんですよね。本当の基本的な常識といふものがないんですよ。だから例へば、親を敬ふ、上長を敬ふ、なんてことは我々にとつては常識だと考へられるのだけれど、当たり前のことのやうに考へるのだけれど、今では、人は平等だ、上下はない、と、かういふ理屈を出して来て、さう思ひ込んでゐるでせう。だけど果たして人間は心底からさう感じてゐるんだらうか。

（**関口**）だいたい敬ふといふことが実感出来なくなつて来てゐる。といふのは、学校の先生にも問題がある。教壇から降りて同じ高さで教育をしてゐるでせう。で、友達のやうな先生を目指し、親との関係も友達のやうな親子関係の中で育つて来てゐるから、権威あるものの前に自分を空しくするといふ体験が全くない。さういふ意味では河村先生のお気持ちからすれば、形式的でつまらない道徳教育だつたかも知れないけれども、まだこの時代の方がまともだつた。今はそれよりもつと悪い。敬ふといふことが本当に判らなくなつて来てゐる。

（加納）昔は良くて戦後の教育がだめになつたんだといふふうに言ふ人もあるけれども、昔から駄目だつたんだね。

（関口）今日、読ませていただいて、昔から見当が違つてゐたんだなと思ひました。

（加納）ええ、昔から見当が違つてゐた。

（関口）大きく違つてゐるか、小さく違つてゐるかだけのことで…。教育勅語の受け取り方だつて間違つてゐたんですね。

（加納）だと思ひますね、私は。

（八木秀次）先ほど、明治以降の学校教育がそもそも間違つてゐたとおつしゃいましたが、それはどういふことですか。

（加納）やはり明治の教育といふのは、先進国に追ひつくといふことが非常に重大だつたからね。だからこそ自然科学的な知識を入れるといふことが非常に大切だつたといふことがあるでせうね。

それからもう一つは、人文科学の方で、日本が主としてドイツに学んだといふことはやはり大きいのぢゃないかと思ひます。英米系よりもドイツに学んだといふことは非常に観念的にものを考へるといふことを学んでしまつたんだね。実際に即して学ぶといふことが疎かになつてしまつた。むしろイギリス辺りの精神の方が良かつた。観念的に考へるより、実際的に考へる、実際に即して自分の経験を基にして考へるといふ考へ方を学んだ方が良かつた。けれども、日本は主としてドイツに学んだ。このことは河村先生もよくそのやうに言はれてゐますね。

（八木秀次）それとともに個人主義の問題があつたのではないかと思ひます。個人人格の完成を以て教育の目標とするといふのは、今日ご紹介頂いた河村先生の文章にも出て来たことですから、この時代にもあつたといふことでせうが、そもそも瑞穂会だとか、一高昭信会、日本学生協会といつた、今の国民文化研究会の前身に当たる団体の運動自体がさう

いふ風潮に対する一つの批判活動として出て来たものですね。

（**加納**）さうですね。

（**八木**）さうしますと、明治以降の教育の問題点として、欧米流の個人主義的な発想の影響が強くあつたといふことが言へるといふ気がします。

（**加納**）そりゃあ、ありますよね、個人主義的なね。

（**八木**）その個人主義的な傾向が戦後はより一層強くなつて来た。

（**加納**）うん、強くなりましたね。

（**八木**）そして今日なほ一層強くなつて来てゐるといふことではないかと思ひます。

（**加納**）さうですね、強くなりましたね。欧米でも別に個人主義思想ばかりだつたといふわけぢゃないんです。ちゃんとした考へ方ばかりが入つて来てゐるんですね。もちろん欧米日本ではどうしてか個人主義的な考へ方はずつとあるんです。両方あるんです。だけど、でもさういふ個人主義的なものが現在では強くなつてゐるでせう、段々にね。さう思ひますが、日本では殊にそれが甚だしい。だから本当に不思議です。

西洋ではもう第一次大戦の時にシュペングラーの『西洋の没落』なんて本が出たわけです。もう当時から当の西洋自体でさういふ西洋に流れてゐる思想に対する批判といふものが出て来てゐたわけです。第一次大戦に対する批判といふのが…。ぢゃあ、さういふ批判が生きて来るかといふと全然生きて来ないわけです。そして第二次大戦でせう。第二次大戦で益々近代思想といふものの破綻が出て来たわけでせう。だからそれに対する反省といふのは出て良いわけだけど、第二次大戦以降、更にひどくなつて来たわけです。だからどこまでひどくなるんだといふことなんだけど、さあ、これからどうなりませうか。

（**八木加枝**）先日、うちに友達が来たんです。まだ結婚してゐない人なんですが、自分は結婚しても働き続けたいといふんです。どうしてかといふと、子供に手がかかるのは五歳までで、それから子供が幼稚園に行き出したりしたら、その余つた時間をどうするのかと思ふと退屈で仕方がなくてノイローゼになつてしまふと言ふんです。旦那さんとの関はり

の中でも、ずつと家にゐると考へ方が一つになつてしまふんぢゃないかと、社会と閉ざされた世界の中にゐることは自分にはとてもぢゃないけれど耐へられないと言ふんです。子供も何れ中学生くらゐになれば、もう親なんか煩はしくなつて来るんだらうと。さうなれば、自分は今、大学を出て、良い職を得てゐるけれども、結婚してその職を辞めてしまふと、折角良い大学を出て良い職を得たのに、もうパートしか出来なくなつてしまふ。そんなの親が泣くと。だから結婚しても今の仕事をずつと続けて行くんだと。続けて行けば仕事も楽になつてお金も充分貰へるやうになる。旦那さんの給料だけだと、もし旦那が途中で死んでしまつた時どうして生活するのかとも思ふと。旦那はしばらくしたら浮気もするだらうし、さうなつた時に自分は耐へられない。さういふ時に外に自分の生き甲斐とか、行き場があれば、気持ちが紛れるから、その方が良いと。こんな具合に色々言つてゐました。私はさうぢゃないと思ふよと言つたんですが、彼女はもう思ひ込みがあつて聞く耳を持たないといつた感じでした。

（加納）そりゃあ、さうでせうね。大体に於いてさういふ考へぢゃないでせうか。だけど時間を余して、自分のしたいことをやるといふことが本当に自分の生き甲斐になるのかどうかといふことなんです。本当に喜びを持つてそれを出来るだらうかといふことを少し考へてみる必要があるといふことでせうね。

（八木）その友達の仕事の内容を聞けば、誰でも取つて替はれる仕事なんです。私はそれに本当の生き甲斐といふものがあるのかなあと思ひまして。

（加納）かういふと非常に男女差別といふことになるかも知れませんが、昔は女の人といふのは本当に家のことが大変だつたんですよ。今と違つて、着物だつて自分で縫つて皆に着せるわけでせう。繕ひはするでせう。何でもしなきゃあならない。足袋だつて破れれば継ぐでせう。さういふことで一日中追はれてゐたわけです。さういふのは、つまらないかといふと、どうなんでせうかね。それぢゃあ、洗濯は洗濯機、食事はレトルト食品、そしてて、うんと暇を作つて、ぢゃあカルチャーセンターにでも行きませうか、といふのが本当に充実してゐるといふ感じを持てるのだらうかといふとそれは疑問ですよね。

（丹羽）私も安いお給料ですけれども、一応、男性と同じといはれる仕事をしてゐるんですけれど、私の周りの友人はバブルの時代に就職しましたので、会社の同期の女性を含めて、大学時代の友人を含めて、割りと良い仕事を持つてゐます。よくみんなと結婚したらどうするのといふことを話しますが、子供が出来るまで働くけれども子供が出来たら辞めるわと考へてゐる人が圧倒的に多くてですね。すごく良い仕事をしてゐても自分は仕事をメインにやつて行くといふ人は半分ゐるかなあといふ感じです。やはりそれはとても華やかな世界で面白いけれども、でもやはり自分には子育てと仕事との両立は無理だと思ふから、それで終はりにするわと。男の方からしたら、折角採つてやつたのに、なんだと、会社の方としては怒ると思ふんですけれども、基本的には女性として一番大事な生き方を取るといふ人の方が私の周りには多いんですね。それはたまたまさういふ友達が私の周りには多いのかも知れないんですけれども、わりと女性は会社に対してはある意味で非常に淡々してゐて打算的だといはれる生き方をしてゐると思ひます。もちろん就職活動中は一生働くと言ひますけれど、いざ会社に入つてみると、会社といふところは男性社会で、そこで改めて自分が女性であるといふことに気付いて、ぢゃあ私は何をすべきなのだらうかと思ふと、私の仕事は誰でも出来るけれども、例へば自分の旦那さんの奥さんであることや自分が産んだ子供の子育ては他の人では出来ないと思つて、良い仕事でも辞めるわと言つてあつさり辞めるといふ人が結構多いので、私はそんなに悲観したものでもないかなと思つてゐます。

先ほど、個人主義にどんどんなつて行くといふお話しがあつたんですけれども、確かに中学校、高校までの一般の教育の場では個人主義を一番価値のあるものと教へられて来たなと思ふんですけれども、大学に入つて色々な考へ方があるといふことが判つて来て、更に会社に入つて私が感じたのは、色々弊害もあるんですけれども、日本のいはゆる終身雇用の世界には良くも悪くも昔の日本の秩序とか、さういふものがきちんと残つてゐて、私たちのやうな安穏として過ごして来た学生たちは初めてそこで上の人を敬ふとか、秩序と

か、とても常識的なことを学べるんです。さういふ何か、ある意味での浄化作用といふものが企業といふ世界には、もちろん弊害もありますけれども、意外な形で残つてゐるやうな気がします。確かに仕事に追はれてゐると普段さういふことは皆考へませんけれども、ベースとしては皆きつと働いてゐる中で素朴に個人個人でさう感じてゐるんだらうなと思ふことがあります。

学校の世界や、私が中・高時代に教はつた価値観とはまた違つた価値観を持つた社会といふものがこの日本の社会にもあつて、それは黙つてゐて行動にも政治的にも表には出ていませんけれども、何かエネルギーとしては潜在的に残つてゐるんぢゃないのかなあと、会社生活の中で色々疑問に感じることはありますが、に素直な気持ちとして思つてゐます。自分を抑へて、個人であることを抑へて、組織の歯車だとは判つてゐても会社のために尽くす、といふ生き方は、良くないことだと批判もされてゐますが、私も確かにさうだと思ふんですけれども、それでも学校で教はつたことだけが全てではなかつたのだなあといふことに気が付くチャンスといふものが、さういふ中でそれぞれに与へられてゐるのぢゃないのかなあといふふうに思ひます。さういふ意味で私は女性としてお勤めといふものをして良かつたなあと思つてゐます。

（加納） それは大変有難いお話ですね。本当のところはさういふところにあるのぢゃないかと思ひます。人間の最も自然な気持ち、さういふ意味では常識的なものといふことですが、人間の本来の気持ちといふものは本来は今おつしゃつたやうなところにあるといふことは間違ひないんだと思ふんです、お友達や会社の皆さんがさういふ気持ちを持つていらつしゃるといふことは。さういふ中で何か世の中の潮流といふものが、さういふ方でない方の理論といふか言説、さういふものを余りにも表面に出し過ぎて、今おつしゃつたやうなことはどこかに隠されてしまふんです。だから問題は、さういふ一般の生活者の問題といふよりは、むしろ学問をする人とか、世の中の表に立つて活動する人の言論とか考へ方といふものの方の問題だと思ひますね。

（丹羽） 中学生、高校生の時代に私が得られた情報といふのは、先づ家族からと学校から、

あとはマスコミといふか、何といつてもテレビからですよね。それでそれが全てだと思つて来てゐたら、実はさうではない社会といふものが日本の中にも、声は出さないけれども、ちゃんと潜在的にあるんだなといふことを知つて私は嬉しかつたんです。確かに学校などは気が滅入るほどに片寄つてゐるといふか、変だなといふふうに、今振り返つてみて思ひます。でもさうではないことが本当なんぢゃないかといふことが何となく無意識にでも考へられる環境といふものが確かにあると思ふんです。私はさういふものは広げて行かなければいけないと思つてゐるんです。

（加納） 折角十何年もの学校生活の期間があるのだから、その時代にさういふふうになつたらとてもいいんですよ。ところがどうも今のところさうでないみたいになつてゐますけどもね。

（関口） 企業が果たしてゐるやうな役割を学校でやればいいですね。やはりおかしいですね、学校は。

（八木秀次） たとへ一般の生活者が大事なことに気が付いてゐたとしても、それに自信を与へてくれるやうな言葉がないんです。知識人の役目といふのは、一般の生活者が何となくこれが正しいのだなあといふふうに思つてゐることに表現を与へることだ、とマイケル・ポランニーといふ哲学者が言つてゐますが、このことは非常に大事なことだと思ふんです。

（加納） そりゃあ、さうですね。

（八木） ところが女性の役割といふことについての、現在の世の中の表面を覆つてゐる言説といふものは、女性がこれまで歴史的に担つて来たことを不当に低く評価するやうなものが殆どで、しかもそれを女性自らが行なつてゐるわけです。流行のフェミニズムの主張などはさういつた類ひのものだと思ひます。その一方で今日先生が紹介して下さつた河村幹雄先生の言葉のやうなものは今の時代どこにもないんです。そのために一般の女性の耳には入つて来ないものですから、家に入つて専業主婦となつて夫や子供のために尽くすこや子供を育てるといふことが何か遅れてゐるだとか、能力のない女性のすることであると

いふふうに思つてしまつてゐて、そのやうな悩みといふものを現代の女性の多くが持つてゐるやうな気がするんです。

（**加納**）さうでせうね。何かさういふふうに教へ付けられちゃつてゐるからね、みんな。本当に心の底からさう思つてゐるのぢゃないかも知れないけども、さういふふうに思はされてゐるからね。

（**関口**）そして環境が非常に閉鎖的でせう。今、住環境自体が閉鎖的ですね。昔のやうにおぢいちゃん、おばあちゃんがゐて、隣のおばさんがゐて、といふのだと、ゆとりがあるんですけれど、それがない中で、側で赤ちゃんが泣き叫んだりしたら、やはり若いお母さんにも焦りが出て来る。それも判らないでもない。

（**加納**）まあ、色々な社会的条件もあるし、親子三代で住めるといふ経済的社会的条件がなかなか難しくなつてしまつたから、その辺も考へなくてはいけないねえ。

（**関口**）昔のやうに親子三代で住まなくなつたことで伝承されなくなつたことといふのがいつぱいあると思ふんです。これは子供にとつても不幸だと思ひます。おぢいちゃん、おばあちゃんがゐれば、逃げ場があるわけですからね。だけどそれがないからお母さんとだけいつも向かひ合つていなければならないのつて苦しいだらうと思ふ。お母さんもきついでせう。

（**北林尚子**）責任が全部自分に掛かつて来ますからね。

（**関口**）片時も気が抜けない感じがするでせうね。だけど大家族だと、その辺は誰かが面倒を見てくれるとか、子供が五、六人ゐるとたいてい上の子が見るんだけどもね。

（**北林**）自分一人しか育てる人がゐないから、産める子供の数も、まあ、二人とかといふふうに決まつて来ちゃふんですよね。しかもそれ以上は面倒は見れないとか。子供の数が少ないといふのもさういふ環境の中で限られて来ますから仕方がないのかなあといふ気もします。でも兄弟が少ないと人間関係もどうしても少なくなるのかなあといふ心配もあります。

（**加納**）だから女性が女性としての自らの役割を自覚していくためには、やはり男性が女性に対する尊敬といふのを持つことが必要ですね。本当にさうぢゃないかと思ひます。河村先生の文章を読んでみても、先生は女性をとても尊敬してゐるでせう。男もさうならなければいけませんね、これは。

（**中澤**）私も、今日、河村先生の文章を読ませて頂いて、やはり自分に子供が生まれたいふことで、ものすごく実感されるといふか、さうだなあ、幸せなことだなあといふふうに感じました。それでも、私、毎日、日常のことで、また一日が終つちゃつた、といふふうな感じを持つてゐまして、何か一つでも、例へば和歌を詠むだとか、何か一つでも、自分も子供と一緒に成長していかないといけないなと思ひながら、なかなかさうもいかなくて、また一日過ぎちゃつたと思つて、これは別に子供が自立してからまた社会で活躍するといふ意味ではないんですが、さうではなくて、子供の手が離れた時に自分がそれなりに何か一つ成長してゐないといけないなあ、何か一つ持ちつつありたいなあといふやうなことを思つてゐるんです。それで今日も御案内を頂いて、是非お話を聞かせて頂きたいなあと思つたんです。

（**加納**）やはり子供が育つて手が離れたら自分はどうだらうかといふやうなことですか。

（**中澤**）別に社会でどうかうといふことではなくて、内面的にでも成長していくためには今が大事だなあと思ふといふことなんです。

（**八木加枝**）中澤さんのおつしゃつたことは私もさう思ひます。やはり家の仕事は毎日大変ですし、クタクタになります。それなのに嫌だとか、忍従だとか、やらされてゐるだとか、義務感などといふものを感じません。夜寝る時も疲れてはゐますが、すがすがしい感じさへします。娘の時分には親の手伝ひも満足に出来なくて、よく怒られましたし、用事を頼まれると不平不満をよく言つてゐました。それが今ではさうでもないのですね。これはどういふ自分の中の気持ちなのかなあと思ふんです。そんな時に森鴎外の『安井夫人』の話が思ひ出されて来て、主人公のお佐代さんといふのは、別に良い家に住みたいとか、

良い服を着たいだとか思はずに、旦那さんが出世していけばいいなあといふ気持ちは持つてゐたけれども、その恩恵に預かつて自分が世間で良く思はれたいだとかといふ気持ちもなかつた。ただ美しいものに対して心を向けてゐたといふやうなことが書いてあつたんですけれど、そのことと私の感じてゐる今の生活が同じといふことではないでせうが、私も結婚して子供を授かり、今、家族といふ掛け替へのないものを守る役割を与へられてゐるやうに思ひます。さういふ中で私も子供と共に成長して行きたいといふふうには願つてゐます。

（古閑） 私は三人の子供を育てました。ここに一緒に来てゐるのが真ん中で、一番下が高校二年生なのでまだ終つたわけではないのですが…。子供が小さい時は育児や家事に時間をとられてしまひますので、これだけでいいのかしらといふ不安がございました。しかし今振り返つてみますと、子供から随分教へられ鍛へられたな、といふ気がしてをります。これは母親でなければ体験出来ない貴重なものでした。ですからまだお子さんが小さくていらつしゃるので、今は育児に専念することが結局は自分を育て成長させることにつながるのではないかと思ひます。かういふことは目には見えませんけれども。育児に携はる時期といふのは長い人生の中ではさう多くはないので、焦らなくても良いのではないかといふ気がします。

（関口） あそこにも先輩が一人いらつしゃいます。

（山内） 私も子供が三人をりますけれども、子供が小さい時は、さういふことを考へなくてもいいと思ひます。主人の母に言はれたこともあるんですが、家族の健康を第一に考へて二人で助け合つて行きなさいと。結婚する時に、主人にも家事をちゃんと手伝つてやりなさいと…。

若い頃には、子供もゐず一際輝いて働いてゐる友達や、きらびやかな生活をしてゐる人を見て、うらやましくも思ひました。私は、料理も出来ませんし、お裁縫もできませんし、人とのお付き合ひも出来ませんが、近所の人との付き合ひの中で、自分の子供だけではなく、仲好く子供が友達を作つて沢山で遊んで欲しいと思ひましたから、たださういふこと

だけを考へて来ました。最近は暇が出来ましたけれども、子供は子供の世界で楽しく遊んで欲しいとか、三度の食事は色々考へて家族が喜んで食べるものを作りたいとか、さういふことだけを考へて何年か過ぎて来たやうに思ひます。さうして、ふと気が付いた時に時間が出来て来たので、何かしたいなと関口さんに相談したことがありました。今は関口さんたちと一緒に本を読んだりしてゐるんですが、やはり若い時は、ご主人のこと、子供のこと、それだけを考へて、更に余裕があれば何か始めてもいいと思ひます。それが第一ではないかと思ひます。やはり、色々、子供が病気をしたりだとか、学校の勉強だとかありますからね。

私は小さい時、田舎に育ちましたので、絵とかピアノとか、つまらないことなんですが、習つたことがなかつたんですね。それで自分の子供には豊かな芸術的な面も育ててやりたいと思つて、三つ位から、今から思ふと馬鹿な親だと思ふんですけれども、ピアノをやらせたりだとか、お勉強の方は余りやらせなかつたんですけれど、さういふことばかりを考へて来まして、自分のことよりも家族のことに時間を取られて来たやうに思ひます。それで子供をピアニストにするといふわけではなくて、色んな意味で広い、芸術的なものにも目が向く子に育つて欲しいと思つて、さう心掛けて来ました。それが実を結んだかどうか判りませんが、さういふのが好きな子に育つて欲しいなと思つて来ました。余り社会との関はりといふのはなかつたんですけれども、近所の人と、子供を通じてのお友達と仲良く暮らして行くといふことで過ぎて来ましたね。まだ下の子が、古閑さんと同じで、高校二年なんですが、それでも何か空しく思ふこともありますけども、でも、まあ、これで良かつたのかなあ、とは思つてゐます。まだ良く判りませんけどもねえ。最後は子供が答へを出してくれるんぢゃないかと思ひます。

（八木加枝） 私の母親がよく、女の証は子供だといふことを小さい時から言つてゐたんで出しました。

（関口） さつき中澤さんがおつしゃつた、和歌を詠んだりなさるといふことはいつでも出来るし、残るし、そして今でなければ詠めないものがあると思ふから、是非なさつたら良

いですね。それは本当に一日一首でも二首でも出来たら素晴らしい。何よりこんな目の前に、生きた、本当に感動的な、存在があるわけだから。

（**中澤**）はい。

（**加納**）ゲーテが、女の本質は仕へることだと言つてゐますね。だけどそれは、河村先生が言はれるやうに、女ばかりではなく、男だつてその本質はやはり仕へることです。男だつて仕へるのが本当です。だからたとへ子供さんの手が離れても仕へる対象といふのはあるんだと思ひます。自分が何をしたいといふ自分の欲望よりも、やはり人間といふものは素直に考へれば、人の役に立つてゐるなあと思ふことが一番幸せなんぢゃあないんでせうか。それがなかつたらあんまり幸せはないんぢゃないかと思ひますよ。

（**山内**）さうですね。夏にですね、主人が合宿教室に行つて、子供も行きまして、一人になることがあるんですね。さうすると時間がいつぱいあつて、最初はホッとするんですけど、のびのびと…。でも何かやはりつまらないんですね、人にしてあげることが何もないから。今日の御飯おいしいとか、平凡なことですけどね。ちょつと目新しいものを作りますと、これはどうして作つたのかとか。さういふ平凡な喜びの中にやはり私は生きて来たやうに思ひました。これからはどうなるかわかりませんけど、家族の健康管理だとか、毎日毎日のことをキチンとやること、それがやはり大事ぢゃないかなあと思ひます。

（**加納**）福田恆存さんがかういふことを言つてゐますよ。女の人は、例へば下手な小説を書くよりも、家族のためにおいしい料理を作る方がよほど文化的だと。

（**関口**）ああ、さうでせうね。本当にさうですね。（一同笑ひ）

（**加納**）これは男の身勝手かなあ。

（**山内**）夕方になつて、お腹が空いて帰つて来ますと、みんな、かうツンツンしてゐるんですよね。何かおいしいものがあると和やかになつて。お腹が空いて帰つて来ますと何かみんな空気がちょつと険しくなつて、食べるものが直ぐなかつたらまた出て遊んで来ましてね。何かそんな…。

（**加納**）だから文化といふものは、よほど考へてみなくちゃね。文化つていふのは何ですか。人が良く生きるといふことですよね。

（**山内**）ウチの娘も結婚はしないとか、子供は産まないとか、今から言ってゐるんですけれども、どうなりますことやら。〝ぢゃあ、お母さん、じっと見てるわ〟と言ってるんですけど…。今のお子さんはみんなさういふことを言ふんですけれど、それはやはりテレビとか新聞からの情報がすごく多いんですね。女の人の生き方といふことについても、平凡な人の紹介は余りなくて、特別な人ばっかり新聞にもテレビにも載ってゐますから、それが今の潮流のやうに思ってしまふんぢゃないでせうか。

（**加納**）やはり今は目立たなくてはいけない時代になってゐるんですよね。目立つことが一番大切になってゐるんだけど、これはねえー。（笑ひ）目立たないこと、目には見えないことが本当は大切なんですよね。

（**古閑**）平凡である幸せといふか、毎日事故もなく、病気もしない、平凡な毎日の家庭の幸せといふものを非常に有難く感じますけどもね。

（**加納**）さうねえ。

（**山内**）先ほど教育の話が出ましたけれども、例へば生徒に迎合するやうな先生がゐますでせう。教壇から降りてとか、服装もラフにズックを履いてとか。でも子供たちは、それを拍手で歓迎するやうなポーズをするけれど、実際、心の中では認めてゐないと言ふんですよね。生徒に媚びるだとか、迎合するやうな先生は本当は嫌ひって言ふんですよね。だから子供が表面で言ふことと本当の気持ちとは違ふと思ふんです。マスコミはその辺のことがよく判ってゐないと思ふんですね。マスコミが子供の本当の気持ちとは違ったところを取り上げるから、子供たちも何となく異質なものを感じてはゐるけれども良く判らなくなるんです。

（**関口**）案外、子供の感覚はまともなのかも知れない。さういふ気がします。

（**山内**）さういふふうに思ふんですよね。だから、その方向づけをやはり今の世の中といふか、大人の人は子供たちにしてあげなければいけないと思ふんです。その意味ではテレビでもラジオでもちょっと気に懸かることがあるんですけどもねえ。今の世の中といふか、マスコミといふのは、子供たちに芽生えた芽を摘んでしまふけれども、それでも社会に出ると、先ほど丹羽さんにお話し頂いたやうに、色々なことを発見するのかなあと思ひまして、お話を聞いてゐたんですけども。

（**関口**）丹羽さんの会社は立派な会社なんですね。

（**丹羽**）絶対それはありません。（一同笑ひ）

（**関口**）しっかりした企業は、しっかりした社員教育をするんですね。

（**加納**）うん。

（**丹羽**）私の勤めてゐる会社も普通の会社で、やはり問題点はいっぱいあるんです。でもさうであつても、社会といふところに出た時に感じたのは、個々の問題点を全部削ぎ落とした時に残るのは先ほど言つたやうなことではないのかなあといふことで言つたんです。ですから会社がそんな美しいユートピアのやうなところではないとは思つてゐます。

（**関口**）でも企業として健全であればちゃんと社員教育をするし、心も健全だから大丈夫ですけれども、この頃は企業だつて結構おかしくなつて来てゐるでせう。

（**加納**）うん、うん、さう。

（**関口**）だいたいもう年功序列が崩れて来てゐるから、さうなれば価値観も変はりますし、対人関係も変はるし。今は学校教育で汚染されてゐるのが全部新入社員教育といふところで浄化されてゐるといふのが現状でせうからね。

（**丹羽**）社会に出て体で覚えなければいけないことつてやはりありますよね。机上の空論で学校の先生から教はつたことは、現実の世の中の流れに身を委ねると、ああ、そんなものでは通用しないのだなと感じることでまだ救ひがあるのぢゃないのかなといふふうに思ふんです。それをみんなが自覚していけば素晴らしい世の中に変はると思ふんですけれど

も。私は絶望はしないで、まだチャンスはあるのぢゃないかなと思つて、期待といふ意味でこれから課題はたくさんあると思つてゐます。

（**関口**）子供が出来たら家庭に入るといふ方が三分の二はいらつしゃるといふのは本当に有難いことだなあと思ひます。

（**丹羽**）みんな言ふのには、自分の親を見て、さういふ判断をしたと言ふんです。親の生き方を見て、良かつたと思ふから自分も同じやうな生き方をしたいと。やはりご両親の影響をすごく受けてゐるんですね。だからさういふ話題になると、友人たちと、自分が親になつた時、子供からさういふふうに思つてもらへる親になるのは本当に大変なことなんだなあと話してゐるんです。

（**関口**）さうでせうね。やはり家庭が基礎なんですよね。

（**加納**）さうなんですねえ。

（**関口**）健全な家庭がたくさんあれば国は大丈夫なんですよね。

（**加納**）健全な家庭といふと難しい事柄だけど、本当は簡単なことなんぢゃないですかねえ。

（**関口**）思ひやりがあつて、和やかでねえ。

（**加納**）さうなんですよね。別に難しいことではないんですよね。この間、高等学校の校長をしてゐる知人が来て言つてゐたけれど、そこの高校は大変な問題校なんださうです、有名な。やはり一番の問題は家庭がないんだといふことをつくづく痛感したつて言つてゐましたね。

（**関口**）さうなんですね。今の丹羽さんのお話を伺つてゐて、やはり良い企業なんだなあと思ひました。といふのは、家庭がちゃんとした人が多いといふのは今ではむしろ珍しいことなんです。問題の多い高等学校の生徒には片親が多いんです。保護者名簿を見ますと、女名前が目に付きます。父親だけの家庭もある。私もその方から聞いたのですが、とにかく校長室に呼ばれて来たお母さんの態度が先づ成つてゐない。そして子供の目が死んでゐ

る。もう魚のやうな目をしてゐる。さう、その方は嘆くんですね。さういふ問題のある家庭だから子供が問題を起こすのでせう。

（**加納**）さうなんでせうね。さうだと思ひますよ。

（**関口**）だから健全な家庭が少ないんだなあとつくづく思ひます。昔だったら少なくとも親は常識があって子供がちょっとおかしいといふことはありましたけどもね。今は親からなんとかしなければどうにもならない。

（**加納**）さういふところが多いのかも判らないですね。

（**八木加枝**）岡潔先生の本に書いてあったんですが、子供はお腹にゐる時からの三十二ヶ月の間に人として生きる基本を学ぶさうです。その時に、人に親切にして喜んでもらへるといふ経験がない子や、愛情や信頼を欠いて育った子は、必ず非行少年になるんださうです。その非行少年を直すのはとてもぢゃないけれども出来ないことで、そして、非行少年が何れ親になれば、その子供もまた非行少年になる。さうなれば、もう国は駄目になってしまふ。普通の人間は、さういふ人とは隔離された生活をしなければ、とてもぢゃないけれども、まともな人間には育たない。かういふことが書いてあったんです。例へば今のマスコミでも取り上げられてゐる女子大生や女子高生の生活の乱れ方を見てゐると、日本も岡潔先生のおっしゃったやうな国になるのかなあと思って悲しくなります。

（**八木加枝**）確かに今の時代は、今日、加納先生が紹介して下さったやうな文章に出会ふ機会もほとんどありません。さうはいっても、本当に心ある人であるならば、かういふ文章に出会ふ機会さへあれば必ず何か気付くことがあると思ふんです。でも、例へば先ほど話した私の友達などには、ただ〝この文章を読んでみて〟と言っただけでは余り効果はないのではないかと思ふんです。だとすれば、私はどういふ言葉で、またどういふ態度で、接していけば良いんでせうか。

（**加納**）なかなか急にはいかないでせうね。やはり八木さんが体で示さなければ駄目なんだね。〝ああ、八木さんはああいふふうにしてゐられるのだなあ〟といふふうに相手が気

が付けば良いんですよ。さういふふうに相手に気付かせられるやうになれば一番良いんだけども、大変だわね。だから確かに言葉で言ふことも大切でせうね。しかし基本はやはり人間といふことになるね。

（**山内**）言葉で言つてもなかなか判らないですね。

（**加納**）さう、判らないね。

（**丹羽**）でも、何度も言はれたのを十年位経つてから思ひ出してみて、ああ、さういふことだつたのかと初めて気付くといふこともやはりあると思ひますので、私のやうな物分かりの悪い者には、仕方がないなと思ひながらも言ひ続けて頂けると有難いのですが。

（**山内**）さういふ人は気にしてゐるからきつと聞く耳を持つてゐるわよ。

（**丹羽**）今、私が全然気が付かないことでも、〝ああ、さういへば〟と後になつてから思ひ出すことが今までの経験の中にもありましたので、これからもきつといつかはさういふ時が来るのぢゃないかと思ひます。

（**山内**）若い人は大丈夫かも知れない。ある程度、人間が出来て来るとだんだん聞けなくなるんですね。

（**八木加枝**）今の世の中、普通であることが何か変はつてゐるみたいに思はれるんです。

（**加納**）まあ、さうね。さうかも知れませんね。

（**八木**）昔の人であつたなら当たり前のことだと思ふだらうなといふやうなことを今の時代にしてゐると、何か変はつたことをしてゐる、特殊なことをしてゐる、といふふうに言はれるなあと最近思ふんです。

（**加納**）口先だけで言ふことになつてしまふけれども、結局のところ、理屈で言ふなら、人間の温かい気持ちが通じるやうになれば良いんですよ。それは理屈だから、ぢゃあ、どうしたら自分の温かい気持ちが相手に通じるかといふことになると、それは実践の問題だから結局は自分で考へなければならないことなんですね。やはり世の中といふのは、さういふものではないかと思ひますよ。本当の基本はやはり人といふことになりますからね。

私たちの国民文化研究会なんていふのも、やはりどうやったら心が育つかといふことを基本に据ゑてゐるんだと私は思ふんです。それがなかったら万事始まらないんぢゃないでせうか。人のやる説教なんてものは、人間、大抵は聞きませんよ。いくら説教したつて気持ちが通じなければ何にもなりません。やはり何か気持ちが通じるチャンスといふものをなるべく作りたいわけです。さういふチャンスさへあれば相手は反撥してもやはり何か気持ちに残ることがあるんぢゃないでせうか。もちろん相手は人間だから直ぐに反省するなんてことは、なかなかないですよ。強烈なショックで、さういふことがあるかも知れないけれども、やはり人間といふのは徐々にしか変はらないものですよね。だから以前、八木さんが結婚の前に、まだヤマハ音楽教室の先生をしてをられるころに言つてをられたけれども、たくさんのお母さん方に接してゐるけれど、今、本当に子供から「お母さん」と呼ばれるに値するお母さんといふ人はゐるのだらうかといふこともね、それは今もさうかも知れない。うーん、どういふふうに対処していつたらいいですかね。

（八木） 自分でも本当の「お母さん」とはいつたいどのやうな人を言ふのか判らない位なのに、いつたい親としてどのやうな生き方をすれば良いのかを教へて欲しい位なのに、目の前には何か変はつた実例ばかりが次々に現れて来て、不安に思つてゐたんです。それで加納先生のお話を伺ひたいなと思つてゐたんです。

（丹羽） 私は言葉の方を先に学んで、後で気が付くといふ愚か者なんです。今日のお話を聞いてゐて、日本のお母さんたちが歴史の中で果たして来た役割が大きかつたのはやはり大和心といふものがあつたからなのかなあと思つたんですが、それでもやはり大和心つて何のことを言ふのか良く判らないんですね。それと、教育勅語の話でも、要するに言葉の一つ一つにとらはれないで、もつと自然に備はつた基本的なものを大事にすることだと言はれても、それは何かといふことが判らないんです。それで、もしそこのところをもう少し言葉で教へて頂けたら少しは判るやうになつて来るかなあと思ふんです。そして私のやうに判らない人といふのは他にもたくさんゐると思ふんです。さういふ人が大和心を取り

戻すためにはどういふことをすれば良いのかといふのをお伺ひしたいんですが。

（**加納**）難しいなあ。これは、八木夫人が結婚なさる前、城ヶ島で合宿をした時、話をして下さった。その時、色々資料を作って下さったんですが、その中から一つ読んでみませうか。

小林秀雄さんと妹さんの高見沢潤子さんとの対話（高見沢潤子著『兄小林秀雄との対話』）がありますね。そこから引かれたものです。対話ですから小林さんと妹さんとが代はる代はるに出て来るんだけど、先づ妹さんが次のやうな質問をするんです。「愛情のない批判者ほどまちがふものはないって兄さんはどこかで書いてゐたわね。」すると小林さんが「数学者の岡潔は〝人間が人間である中心になるものは科学性でもなければ論理性でもなく、理性でもない。情緒だ〟とまで言ってゐる。理性第一の学問をしてゐる人がさういふことを言ってゐることをよく考へてみなければならない。」と答へるんです。今度は妹さんが「非行性少年はね…」と話し掛けるんですが、「非行性少年てなんだい」と。兄さんはよく判らなかったんです。そこで説明するんです。「不良少年のことよ。このごろは非行性少年て言ふの。その非行性少年たちをあつかってゐる人が言ってたけど、それには共通した性格っていふか、特徴っていふものがあるんですって。それは情緒がないっていふことですって。きれいな花を見てもぜんぜんきれいだと思はない。」それに対して小林さんが「このごろは勉強、勉強で知識のことや頭のことばかりにみんな夢中になってるだらう。心の問題をすっかりわすれちまってるからね。さういふ情緒のない、不良少年が多くなるんだ。学問だけすんで知識がどんなに広まっても、それで社会はよくなりゃしない。いくら学問をしたって人間はそれだけぢゃだめなんだ。」って言ったんですね。妹さんが「大和魂がない」と言ふと、小林さんが「ああ、大和魂がないね。情緒のないところには真実も愛もないからな。さっき、お前が、あの山のさくらを見て、〝きれいね〟といったらう。きれいと感じるのは、情緒だよ。愛だね。ただ眺めてゐるとか、好奇心でなにか見ようとするときには、愛はおこらない。わかりきってゐるさくらでも、いつまでも見あきず、見入ってゐるのは愛情だ。そのものの中に入って、一つになる、さくらと一つになっ

たとき、愛情になる。」と答へるんです。

だから大和心といふことも、情緒のないところにはやはり大和心はないんですね。僕らの会（国民文化研究会）では、和歌を詠むといふことを大変大切にしてゐるんですが、それは、心を養ふといふか、情緒を養ふといふことを勉強しませうといふことなんですね。これはやはり私たちのやってゐることの基本ではないかと思ふんです。まあ、私自身がそんなことうまくできてゐるかといふと、うまく出来ていませんよ、もちろん。うまくはできてゐないけれども、さういふことを一番心掛けるんですね。素直な心をどうやって育てればよいのかといふことだけれども、花がきれいだってことは素直でないとやはり判らないことですね。子供が可愛いといふのだって素直になれば判るわけでせう。さういふことはみな本来そんなに難しいことではない筈だし、普通のことなんだけども、自分の周りといふか、周囲といふものは何か一つの非常に強い自我意識的な方向性を持った考へに囲まれてゐるから、それがうまく出ないんですね。僕はさう思ひますね。

（丹羽） それで先生が先ほど言葉でなくて態度だよとおっしゃった意味が何か判ったやうな気がします。

（加納） これも小林秀雄さんの本の中に出て来るんですが、本居宣長に「意は似せ易く姿は似せ難し」といふ言葉があります。普通、意を真似るのはなかなか難しいけれども、姿なんかすぐ真似出来るっていふでせう。ところがその逆で、姿といふものは真似できないんだと言ふんです。だから姿といふものは、ただ表に飾ってゐる物質的な形ぢゃないんですね。そこから匂って来るものなんです。香り、香って来るものが姿なんです。さういふものは真似ようとしても真似られない。似せようとしてもなかなか似せられないことです。

〝あの人はいいなあ〟と、かういふふうに言ふのもやはり姿・形が美しいといふよりは、そこから湧いて来るものが良いっていふことです。湧いて来るってものは、その人の個性だから、それをただ真似ようと思っても難しい。自分の本当の心のうちから起こって来るものでなければ、さういふものにならないものですからね。口真似でいくらしても、さう

いふものは生まれないといふことだと思ふんです。さういふ意味で姿は大切だといふことを言ひたいわけです。ぢゃあ、お前の姿は良いかつて言はれると困るんですけれどもね。それだからといつて言葉は駄目だ、大切ではないと言つてゐるわけでは少しもないんです。

高橋鴻助先生といふ旧制の佐賀高校の先生をしていらつしゃつた方がおいでですが、もう亡くなりましたけれど、英語の先生で、我々が昔教へを受けた方なんです。その方が書いてをられる中に、かういふのがあるんです。明治天皇の御製に「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」といふ有名なお歌がありますよね。このお歌のご趣旨を一層よく仰ぐことができるやうにと、これも我々の先生なんだけれども、井上孚麿さんといふ憲法の先生が仮の替へ歌を作られたんです。それはかういふ歌です。「よもの海みなはらからと思ひなば世に波風のたつことあらじ」　この歌と前の御製と、どこがどう違ふか、さういふことを良く考へると明治天皇のお気持ちが良く判る、そのためにかういふ歌を仮に作つたんだと言ふんです。さあ、どこが違ふかといふと、「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ」といふのはね、「など波風のたちさわぐらむ」といふところが、平和に対する本当の気持ち、平和を望む本当の気持ちだと言ふんです。平和に対する願ひが表れてゐるんですね。片方は「よもの海みなはらからと思ひなば世に波風のたつことあらじ」、ただ一片の理屈を詠んでゐるだけ、と、かう言ふんです。それはひとつも人を動かすことはない。明治天皇のお歌の方が本当の平和に対する願ひが籠つてをり、それが人の心を動かすんだと、かう言ふ。だからいはゆる平和主義といふのはね、平和の理論であつて、それは余り人を動かさないし、それに余りこだはると間違ふといふことですよね。「など波風のたちさわぐらむ」といふのは本当に世の中をよく見てゐるわけですよ。波風は騒ぐんですね、どうしても。これは騒がないと思つたつて騒ぐ。騒がないと思つて、波風は立たないんだと思へば平和が来るといふやうなことは理屈であつて、世の中はどうしても騒ぐんですね。本当の平和の願ひといふのは、さういふことを率直に認めた上で生きるんであつて、さういふ前提をなくしてしまへば、全然現実に生きた感動といふのはないといふことですよね。二つの歌はどこが違ふかといふことを良く味

はつてみて下さい。いくら世の中みな同胞と思へば良いんだと言つたつて、さうならないのが現実。そこを如何にして平和にしようかといふところに人間の苦しい願ひがあるわけです。さういふ現実を認めないと、何か空想的な平和主義になつてしまふといふこと、それでは平和は守れないといふことですね。他のことでもみな同じことです。

（**関口**）もう一度、二番目の歌を教へて下さい。

（**加納**）「よもの海みなはらからと思ひなば世に波風のたつことあらじ」　あんまり良くないね、これは。（一同笑ひ）さういふことは理屈であつて実際ではない。だから平和平和と言つてゐれば平和になるかと言へばさうではない。なかなか世の中は平和にならないと思つて、それに対する用意をしてこそ平和に対する願ひは本当に生きるといふことですね。現実を忘れては駄目だといふことです。

（**北林幹雄**）皆さんのお話を聞かせて頂くだけでも楽しかつたんですが、今日の先生のお話を聞かせて頂きまして特に心に残りましたのは、人に仕へるといふことです。色々体験を積んで行きますと、どうも増上慢に陥るといふか、自分がやつてゐるんだといふやうな驕りみたいな気持ちが湧いて来まして、上司に対する態度にしても、昔と自分の態度が変はつて来るやうな、仕へる心といふか、それを失つてゐるところがありはしないかなあといふことを思ひ返されました。それで先生のお話でハッとさせられる思ひがしました。それと、人に仕へるといふのは、上の人に限らないのではないかなあと思ひまして、先ほどから母親の話が出ていますけれども、ある意味では子供に仕へてゐるといふところもあるのかなあといふ気もします。

（**加納**）その通りだと思ひます。

（**北林**）仕へるといふことはさういふ意味では大切なことではないかなあといふ気が致しました。

（**古閑倫子**）今日伺つたお話の中で大和心といふのが非常に心に残りました。これから子

供を産み育てる時、自分が子供の情緒を育てて行くことができるのだらうかと思つたんですけれども、大和心といふのは、本来、誰にでもあるものでせうか。

（加納） 大和心といふ言葉に余りとらはれない方が良いんぢゃないでせうか。例へば日本主義なんて言葉がありますけども、日本主義なんて言葉に余りとらはれない方が良いんであつて、素直に生きれば良いんですね。自然に日本人であるといふふうにむしろ考へた方が良いんぢゃないでせうか。我々がかういふふうにして生活してゐるのは、やはり本来の長い歴史の空気の中に生きてゐる筈なんですから、素直になれば大和心は誰にも備はつてゐるといつてよいのではないでせうか。余り日本とはどういふことかといふふうに抽象的に考へると、何か判らないですからね。僕だつて日本精神とは何ぞやなんて言はれたら、ちょつと答へに困りますよね。よく外国の思想を日本化すると言ひますが、日本化するといふのは無理やり日本の型にはめるといふやうにむしろ考へない方が良いと思ひます。日本の型といふものとは何かといふことを考へると何か非常に堅苦しくなりますね。だけど外国の思想でもさうなんだけど、ただその表面だけを理解して取り入れるとか、何か説明するとかいふことではなくてね、全部自分の本当の気持ちから受け取つて、例へば自分の行動に生かすといふやうなことを考へれば、表面的な理論の理解だけではなくて、本当に自分の心に溶かしてみなくてはならないわけですからね。さうすれば自然に日本人としての考へ方に沿つたものになつて来るんだらうと思ふんです。それを結果から言へば日本化したといふことになるかも知れないけれども、初めから日本的な型がかういふものだから、そこに押し込めなければいけないといふやうな考へ方になつたら、ちょつとそれは無理があると思ひます。さういふものぢゃないんだと思ふ。自分が真剣に取り組んで、その思想を生かさうといふことを考へるならば自然にそれは我々の気持ちに沿つたものになるだらうと思ひます。それが日本化するといふことぢゃないんですか。さう考へたら余り窮屈に考へないでも良いんぢゃないでせうか。

（八木秀次） 蛇足ですが、昭和四〇年に岡潔先生が国民文化研究会の合宿教室でお話しになられた記録が『日本への回帰第一集』（㈳国民文化研究会刊）に「日本的情緒について」

と題されて収録されてゐるんですが、その中で、岡先生の御講義についての質疑応答部分に「女性と日本的情緒」といふ部分があるんです。少し読んでみますと、「先生は特に女性は日本的情緒の中に住んでほしいとおつしゃいましたが、なぜでせうか。また子供に接する時もつとも大切なことをお教へ下さい」といふ質問に対して、岡先生は「子供に接する時に最も大切なことはやはり日本的情緒といふことです。その中に生きる人をつくるといふことです。人の心が良くわかる、わけても人の悲しみが良くわかるといふのが日本人です」と答へていらつしゃいます。日本的情緒、大和心、大和魂といふと、ちょっと判りにくいとも思ふんですが、ここでは岡先生は「人の心が良くわかる、わけても人の悲しみが良くわかる」といふことだとおつしゃってゐるんです。極めて平易な言葉ですが、人の心が良く判る、人の悲しみが良く判るといふのは実際大変難しいことです。先ほど先生が紹介された大江匡衡と赤染衛門の歌に出て来た乳母の話にしても、知識のある人よりは人の心が良く判る人の方が乳母には相応しいんだと言ってゐるやうにも思ふんです。大和心といふ言葉を岡先生のおつしゃってゐるやうに理解することもできるのではないかと思ひます。

（加納） なるほど。それは簡潔で勘所を突いたいいお話ですね。

（中澤） 情緒を育てるといふ大きな使命、大切な役割といふことを私自身が担ってゐるといふことを考へたら、普段の生活の中でどうでも良いやうなことにとらはれないで、豊かな心を持つて毎日生きて行きたいと、気持ちを新たにさせて頂きました。

（加納） 心を豊かにさせるといふことは口で言へば簡単なことだけど、なかなか難しいことです。やはり小さいことにもこだはりますからね。まあ、さういふのとやはりしょっちゅう戦ふより仕方がないんですね。やはり自分の気持ちの中で色々争ひはあるわけです、きれいな心ばかりではないから。人間なんてものは本当に矛盾してゐるから、さういふもんですよ。だから誰だってしょっちゅう自分の気持ちの葛藤といふものはあるんですね。

（**北林尚子**）先生のお話や皆さんのお話を聞かせて頂いて、気持ちが軽くなつたなあと思ひました。

（**山内**）皆さんが真面目に取り組んでいらつしゃるお姿を拝見しまして、もう少し私も普段の生活を緊張させなくてはいけないなと反省しました。

（**古閑恭子**）基本が家庭生活にあるといふことをもう一度肝に銘じまして生活して行きたいと思ひます。

（**丹羽**）会社で働いてゐると気が付かないうちに男性的な考へと生き方を当然と思つてしまつて、いつの間にか自分が女性であることを忘れてしまふんです。今日お話し頂いたやうなことも素晴らしいことだと思つてゐても、やはり時々かうして文章として読んだり、態度で示されたり、お話を伺つたり、考へたりして、時々立ち止まつてみなければ、つい忘れてしまひがちになるものだと思ふんです。本当に私は素晴らしい可能性を持つた女性として生まれて来て良かつたなあ、と確認することが出来て、今日は本当に良かつたと思ひます。

（**加納**）余り良いお話も出来なくて。

（**関口**）私も今日この資料を読ませて頂いて、ゲーテの言葉などは、まるで大和撫子に言つてゐるやうな言葉で、かういふ考へが西洋にあつたんだといふことを非常に驚きました。西洋と言へば個人主義の思想しかないやうになんとなく思つてゐたのはなんと怠慢だつたのかと思ひました。河村幹雄先生の文章も、昔、読んだことがある筈なのにやはり今読むと、ああこんなに素晴らしいことをおつしゃつてゐたのだなと思ひました。

（**八木秀次**）僕自身は加納先生から今日のやうなテーマでお話を伺つたのは初めてなんですが、今日のお話を伺つてゐて、これは男性も是非聞くべき話だなあと思ひました。今の時代、今日のやうなお話は殆どない大変貴重なものです。またそれだけに求められてゐるとも思ひます。ですからこれをまとめてみる必要もあるのかなと思ひました。

（**加納**）本当にありがたうございました。今日は皆さんお子さん連れで大変だつたと思ひます。

（**八木**）加納先生にもご無理を申し上げまして、ありがたうございました。

（**加納**）またかういふ機会がありましたらいつでもどうぞ。

（**関口**）さうですね。そしてかういふふうに、山内さんや古閑さんのやうに、子供を育てられた方がいらつしゃるのが良い。

（**加納**）さう、本当にね。

（**関口**）現役をちょつと終はつた位の方がいらつしゃるのが良い。

小林秀雄先生が〝女性の生き方は本当に難しい。簡単に言へない〟とおつしゃつたんですね。それで小林先生に〝手本になるやうな人を教へて下さい〟と言ひましたら〝いやあ、知つてるけど、そりゃあ、君、知らない人だ。〟つまり誰々の奥さんといふことなんですね。（一同笑ひ）〝どこどこの誰々さん、さういふ人だ〟つておつしゃつたんです。だから、ああ、やはりさういふ中に小林先生は理想の女性像を見出していらつしゃるんだなあと思ひました。

（**加納**）やはり口では言へないんでね。やはり姿なんだなあ、それは。

（**関口**）さうなんですね。

（**加納**）口では言へないといふことはないけれど、そりゃあ、なかなか言ひ尽くせないですね。ある一面しか言へませんよ。全体をふつくらと見せるといふことは出来ません。結局のところ、人間の持ち味といふことになりますかね。だからそれぞれの人がそれぞれの持ち味を持つて下されば、これは一番良いんです。みんな同じ持ち味だと詰まらないですからね。それぞれの人がそれぞれの持ち味を持つて生きて下されば一番良いわね。さうでなくつちゃあ、楽しくないぢゃないの。（笑ひ）

（**関口**）本当に今日は長時間ありがたうございました。

（終り）

（平成六年七月十日（日）午後一時三〇分より四時三〇分まで、東京都大田区立馬込文化センターにて）

（校正を終へて）

拙い私の話を記録するためにたいへんな手数をかけていただいたことを心から勿体ないことだと思つてゐる。この日の会合は、この大きな主題についてほんの糸口をつけただけのものであるから、皆さんの間で更に対話を深めて下されば有難い。この記録を通読して痛感したことは、女の方々の発言が日常の現実に密着して切実なものであつたのに対して私の言ふことはまだ答へになつてゐないといふことだつた。それは勿論、私の勉強の至らなさに起因することだが、やはり男といふものは、なにがしか抽象的で足が地につかないといふ傾きがあるのではないかと思つたりもする。多田富雄、中村桂子、養老孟司、三氏共著の『〝私〟はなぜ存在するのか』といふ本を読んでゐたらその中に、女といふものは「存在（もの）」であるが男は「現象（こと）」なのではないかといふことが書いてあつた。科学の最先端をゆく学者の知見について素人の門外漢が勝手な想像をたくましくすることの危ふさは十分承知の上で、この日の論題に併はせ考へて成程と思ふところしきりであつた。どこの国でも母の国、母国といつて、父の国といふのはあまり聞かない。ドイツ語では"Mutterwitz"（母の知恵）とはいふが"Vaterwitz"（父の知恵）といふ言葉は無いさうである。このやうな先人の言ひ習はしには最新の科学の知に照らしてみても、やはり根拠があるやうに思はれる。

終りに、山内恭子さんのことを落すわけにはいかない。恭子さんはこの会に出席されて月余ののちに急逝された。その知らせに接したときの驚きと悲しみは到底言葉に現はしきれない。その何事もないやうな至醇のことばでこの座談会に美しい花を添へて下さつたことを私は忘れることはないであらう。ここに、深い感謝と哀悼の意を表させていただく。

（加納　祐五）

（編集後記）

本書は、㈳国民文化研究会に関係する有志によつて、去る平成六年七月十日（日曜日）午後一時三〇分より四時三〇分までの間、東京都大田区立馬込文化センターに於いて営まれた、同研究会監事であられる加納祐五先生の御講話を伺ふ会（第一部）およびその後引き続き行はれた先生を囲む座談会（第二部）の記録である。そのテーマは主として女性の生き方・務めといつたことについてである。

先づ、ここで、このやうな会を催すに至つた経緯について少しく述べさせて頂きたい。今から三年前の平成四年の初頭、この頃、大学教官有志協議会・㈳国民文化研究会主催の全国学生・青年合宿教室に参加した経験を持つ女子学生と若いOGとの間で、小さな合宿を開かうといふ話が持ち上がつてゐた。協議の結果、三月に神奈川県・城ヶ島に於いて小合宿を行なふといふことになつたのだが、その柱として加納先生に女性の生き方や務めといつたことについて書かれたいくつかの文章を紹介して頂き、先生にはそれについて解説を加へて頂きながら皆で輪読して行くといふことが据ゑられたのであつた。合宿は全国より十名ほどの参加者を得て成功裡に終はつた。合宿終了後、参加者は直ちに記録集の編纂に入つた由ではあるが、諸般の事情により発行されるには至らなかつたやうである。私事で恐縮だが、その後、編者は縁あつて、この女子合宿の参加者であり、企画運営者の一人でもあつて、記録集の編集担当であつた現在の家内と結婚することになつた。同年十一月、㈳国民文化研究会の会員の皆さんに私どもの結婚を祝つて頂く会を催して頂いたのであるが、加納先生にはその会にも御出席頂き、更に御祝辞も賜つた。御祝辞の内容はゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の一節を引かれて、女性にとつての日常の家事に従事することの意義を説かれたもので、新妻への何よりの励ましの言葉となつたのだが、私どもをはじめ、会に参加して下さつた方々に深い感銘を与へて下さるものであつた。ところが、この時のお話もテープに録音するなどの手段を取つてゐないために、その会に出席して頂いた方々の記憶に残るのみのものになつてしまつた。（加納先生からは、その後、家内宛に前記の『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の一節を書き抜かれたものを送

つて頂いた。家内は折に触れてその言葉を思ひ返し励まされた由である。）

以上の経緯からもお判りのやうに、本書第一部にまとめた加納先生の御講話は、いはば編者夫婦の怠慢と不手際によつて記録されないままになつてゐた、平成四年三月と同年十一月の二度の機会のお話を、今回、御無理を申し上げて、先生に再現して頂いたものである。

それでは何故、先生に御講話を再現して頂くといふやうなことをお願ひすることを思ひ立つに至つたのか。それは一つには編者夫婦が先生のお話を記録しなければならない責めを負つてゐると感じてゐたためである。しかしそれとともに、先生の、女性の本質や務めとはどのやうなものなのかについてのお考へは一部の者がこれを独占して置くには余りにも惜しい性質のものであり、これを文章化して、今の時代にこそ広く多くの方々に、とりわけこれから結婚をして子供を産み育てることになる若い女性に是非とも知つて頂きたい性質のものであるとの確信を時間が経過するにつれ強めて行つたからでもある。

昨年来マスコミで報じられてゐる女子高校生の性の乱れや、若い女性によるいはゆる不倫の横行、これらは従来マスコミが興味本位で報じて来た類ひの一部特殊な現象ではもはやなくなつて来てゐる。一たび我々の周囲を見回してみれば直ぐにでも見当たるやうな、そして今や決して我々を驚かすことではなくなつて来てゐる現象でもある。また、女性の社会進出が声高に主張され、結婚して家庭に入り子供を産み育てるといふことが、あたかも意識の遅れた、何も能力のない女性のすることであるかのやうな言説が現在では一部の主張ではなくなり、一般の女性にも浸透しつつあるやうである。

このやうな中で、女性といふ存在の本当の〝尊さ〟とは何であるのかを説かれた加納先生のお話は今日では大変貴重なものであり、また、それだけに今の世の中から求められてゐるのではないかと思つたからである。

以上のやうな気持ちを㈳国民文化研究会の大先輩である関口靖枝さんに漏らしたところ、さうであれば、加納先生のお話を伺ふ会を開いて、若い女性、とりわけ女子大学生に聞いてもらふ機会を持たうではないかといふことになり、六月下旬、御講話の御依頼を申し上げ、先生には急な申し出にも拘らず幸ひにも御快諾頂いた。併せて先生には御講話の後に

それについての座談会を開いてはどうかとの御助言も頂いた。かうして在京の知友に御案内申し上げ、当日を迎へたのである。

当日御参集頂いたのは、加納先生を含め十一名であった。残念ながら当初予定してゐた女子大学生の参加は前期試験を目前に控へてゐたこともあつて、一名に止どまつた。しかしながら当初の狙ひとは異なることにはなつたものの、出席者の構成は、期せずして、育児を終えた先輩主婦、育児真最中の新米主婦（何れも乳児を連れての参加であつた）、キャリアを持つ女子社会人、女子大学生、それに新米主婦の夫、といつた絶妙なものになつた。しかも、それぞれに初対面といふ場合も多くあり、一堂に会したのはこれが初めてといふ取り合はせでもあつた。しかし、それにもかかはらず座談会に至つては、特に司会者を設けないでも次々に質問や感想が出され、終始和やかな雰囲気で行なふことが出来た。その様子は詳しくは本文によつて知つて頂く外はないが、出席者の一人である丹羽冬紀子さんから当日のお礼に添へて感想を寄せて頂いてゐるのでここに紹介させて頂く。「今日は加納先生や皆様とお話をしてゐるうちに、自分の中に眠つてゐた優しさが引き出されるやうな、胸が暖かくなるやうな、嬉しい感じが致しました。赤ちゃんと一緒に参加された皆様の姿勢に、そして赤ちゃんたちの愛くるしい笑顔に、何かとても大切なことを教へて頂いたやうにも思ひます。」この文面から、その時の和やかな雰囲気がお判り頂けるのではないかと思ふ。

当日、終了後、直ちに、参加者の中から、当初から記録する手筈になつてゐた加納先生の御講話の部分のみならず、その後の座談会の部分をも記録に留めてはどうかとの声が起こり、早速、その準備に取り掛からうといふことになつた。ただ大学教官有志協議会・㈳国民文化研究会主催の全国学生・青年合宿教室（八月上旬開催）を間近に控へてゐることもあつて、実際の作業は更に八月のお盆休みを終へてからにしようといふことにして、作業分担を、当日の模様を録音したテープ（九十分テープ二本）を起こす作業を山内恭子さん、古閑恭子さんのお二人にそれぞれ一本づつ担当して頂き、それを基に編者が文章化して行き、編者と家内とでワープロに入力して行くといふことに決めた。編者が文章化する方針はなるべく当日の雰囲気を伝へるといふ趣旨から、御講話、座談会ともに、日本語と

して通りのよいものに直すに止めるといふことになつた。そしてお盆明けに山内さんのお手元に録音テープが届くやう編者から発送したのであつた。山内さんからは八月二十日の午前、受け取りのお電話を頂いたが、その時、千葉の御実家のお母さんが御病気で看病のため翌日より帰省するので、テープ起こしの作業は再び横浜の御自宅に戻つて来てからにしたいが、古閑さんに先にテープをお渡しして作業に取り掛かつて頂いてもよいでせうかとのお話だつたので、それで構ひませんとの返事をして電話を終へたのである。

ここで些か詳しく作業の経緯を書かせて頂いてゐるのは、他でもない。あらうことか、お母さんの看病に帰省されたはずの山内恭子さん御自身が御実家で脳出血で倒れられ、八月二十七日、満五十二歳の若さで急逝されたのである。編者が電話で話をしてから僅か一週間後のことであつた。電話での山内さんの声は今でも耳に鮮やかに残つてゐる。本書第二部「座談会」をお読み頂いてお判りのやうに、山内さんはここで積極的に発言をされてゐる。その内容は何れも御自身の経験に基づいたものであり、あるいは御家族の前では余りロにされることのなかつたやうな、妻として母としての感慨を披瀝されたものではなかつたかと思ふ。このやうに、本書第二部の座談会は、当日には予想だにしなかつたことではあるが、山内恭子さんといふ一主婦の、ご主人やお子さん方に遺された思ひを記録することにもなつてしまつたのである。読者にはこの点についても留意して全文をお読み頂ければ幸ひである。

かうして編集作業の過程で我々は山内さんの急逝といふ思はぬ事態を迎へた。テープ起こしの作業は山内さんの御遺志を引き継いで古閑さんが山内さんの担当分を含めてお一人で取り組んで下さつた。古閑さんは家事の合間をぬつて約一ヶ月をかけてテープ起こしといふ大変根気の要る作業をして下さつた。山内さんの御供養になればとの御気持からであつたと聞いてゐる。古閑さんが起こして下さつたものは直ちに関口さんの手に渡り、関口さんによつてテープの切れ目部分や不明部分に補足をして頂いた後、十月初め、編者宛に送つて頂いた。編者は直ちに文章化の作業に取り掛かり、併せて家内の協力を得てワープロに入力して行つた。そして十一月下旬までにその作業を終へ、その内容を加納先生に見て頂くべく原稿をお送りした。先生には直ちに加除の御指示を頂いて御返送頂いた。その

後、関口さん、古閑さんに、校正作業を含め、詳細に内容を検討して頂きながら更に修正作業を継続して行った。加納先生にはその後、「校正を終へて」と題する御文章をお寄せ頂いた。その後、更に修正を重ね、なんとかここに約半年の期間を経て本書を完成することが出来たのである。

なほ、本書の表題について少々説明をさせて頂きたい。昨年七月の会は特にその演題を頂いて催したものではなかつた。本書にまとめるに際し、何か表題に当たるものが必要といふことになり、先生にご意向を伺つたところ、「女であることについて」は如何かとの御指示があつたが、他に適当な題があればそれでもよいとのご返事であつた。結局、先生から頂戴した題を副題とさせて頂いて「母の智ー女であることについてー」と題させて頂いたのは理由がある。その一つは、先生から頂戴した「校正を終へて」と題する御文章の中にドイツ語の"Mutterwitz"といふ語についての言及があつたからである。この語は直訳すれば「母の智」といふことになるが、一般に独和辞典には「常識・良識」との訳語が当てられてゐる。母の智＝常識・良識であることは興味を引かれるところである。実は十数年前、『諸君！』誌上で渡部昇一氏が、やはり「母の智」と題して、この語に触れた文章を書いてゐるのを読んだことがある。渡部氏は人生の岐路の当たり必ずと言つてよいほど母上に判断を仰いで来たさうである。氏の母上は決して教育のある方ではなかつた。しかし、それでも〝母の判断はいつも正しかつた〟。このやうなことが書いてあつたと記憶してゐる。この内容が（加納先生が紹介して下さつた）河村幹雄先生のお考へ－妻として母として夫や子供にその心魂を捧げ尽くす中で女性はその人格が完成されるといふことー と ピタリと符合する思ひがして、七月の会合の直後に家内に話してみたことがあつた。かうした経緯があつただけに先生から頂いた御文章の中に"Mutterwitz"についての言及があつたことに、偶然とはいへ、不思議な縁を感じたのである。そして、そのことが「母の智」といふ表題こそ本書に相応しいのではないかとの思ひを強くさせたのであつた。このことについて、関口さんにご相談申し上げ、また加納先生の御了解も得て、本書を「母の智ー女であることについてー」と題させて頂いた次第である。

本書発行に当たり、何より加納祐五先生には篤くお礼申し上げたいと思ふ。既に記した

やうに、先生には過去二度に亘り貴重なお話を賜つて置きながら、いはば編者夫婦の怠慢と不手際によりその内容を公に出来なかつたわけである。そして編者のこの度の甚だ失礼な申し出にも拘らず再度お話しして頂くことを御快諾頂いた。加へて御自身の御講話の部分のみならず、その後の座談会の部分にも、その全てに亘つて目を通して頂き、加除の御指示を頂いた。更に「校正を終へて」といふ御文章もお寄せ頂いた。次に関口靖枝さんには会の開催やその後の編集作業など何かと御相談に乗つて頂いたのみならず、当日は関口さんのお誘ひで山内さん、古閑さんの参加を得ることが出来た。お陰で座談会の内容も体験に基づいた重厚なものになつた。そして何より、もし関口さんが山内さんをこの会に誘はれることがなかつたならば（山内さんにはご無理申し上げてのご参加と聞いてゐる）、山内さんが御家族への思ひを被瀝されることも、また、それがかうして記録されることもなかつたであらう。最後に本書を今は亡き山内恭子さんの御霊に捧げたいと思ふ。本書の発行が山内さんへのせめてもの御供養になれば望外の幸せである。

なほ読者には忌憚のない御意見を賜れば幸ひである。

平成七年一月十五日

（八木　秀次）

（付　記）

年明けて平成七年一月十四日、編者は加納祐五先生より左のやうなお手紙を頂戴した。本書の内容に関係することでもあり、また重要なご指摘であると思ふので、先生のご了解を得て、ご紹介させて頂くことにしたい。（なほ、先生ご指摘の山内恭子さんのご発言は本書四三頁に収録されてゐるので参照されたい。）

○

昨夏の座談会の折、山内恭子さんがこんなことを話してをられます。原文がないので正確ではありませんが、お嬢さんと会話を交してをられたとき、お嬢さんが、母上にとつてはおそらく気になるであらうやうなことを申されたとき、直ちにそれに反論したり異見をさしはさんだりせずに、「それぢゃ、お母さんはじっと見てゐるわ」といふやうに答へられました。その印象が私には深く焼きついてゐます。「みそなはす」といへば、やんごとなきあたりのことでせうが、大いに通じるものがあるのではないかと思ひます。

そんなことを考へてゐた折柄、たまたま昨日、保田與重郎さんのものを見てゐたら、次のやうな文章が目につきました。感一入でしたのでご紹介します。

一月十三日

加納祐五

遠方ながら母見てゐ申す

本居かつ

本居かつは、本居宣長の母。宣長は數え年の十一歳で父を失ったので、この母が一人で宣長たち兄弟をそだてたのです。宣長は、二十歳になるまえに、學問をするために、京都へ出ました。京都にいる宣長をはげました母の手紙の中に、このことばが出ています。

無理なことを人からすすめられて、困った時は、〝遠方ながら母見てゐ申す〟といっておことわりなさい、と書いてあります。「どんな遠方からでも、母はあなたのことをじっと見守っているのですよ」と母はわが子にいっているのです。何という心にしみることばでしょう。

宣長は、日本の生んだ、いちばんりっぱな大學者です。この母のことばは、今も日本中のすべての母が、わが子に對して持っている氣持ちの深さをあらわしたことばです。

〔保田與重郎「東西金言集」（初出『中学一年生の計画学習』）、『保田與重郎全集別巻一』所収〕

（「国民文化研究会」版の発行に際して）

本書の初版は本年一月二五日に印刷・発行されたものである。印刷・発行といっても、B4判の用紙にコピーで印刷し、それを袋綴ぢにしてホチキスで綴ぢるといふごく簡単なもので、部数も四十部といふささやかなものであつた。これを会合の参加者やその他の知友にお送りしたところ予想外に大きな反響があつた。お送りしたほぼ全員の方々から何れも心の籠つたお礼や感想のお便りを頂き、中にはご自身で相当部数をコピーして知人に配布してゐる旨を記してある方もをられた。かうした中、㈳国民文化研究会副理事長・元九州造形短大教授の小柳陽太郎先生から、これを一人でも多くの方々に読んでもらへるやう国民文化研究会から女子教育シリーズの第一巻目として発行してみないかといふお勧めを頂いた。早速、二月の常務理事会、四月の定例理事会で諮つて頂き、この度、そのやうにするやう決定して頂いた。今回、この「国民文化研究会」版の発行に際して、初版のB5判からA5判へ、その大きさを変更した。また第一部の引用文については読者の便宜を考へてルビを付け加へた。更に加納祐五先生には若干の加筆もして頂いた。この度、このやうな立派な刷り物にして頂けたのは、ひとへに小柳陽太郎先生のご尽力によるものである。先生には篤くお礼申し上げたい。また多額の印刷代を提供して頂いた㈳国民文化研究会の小田村寅二郎理事長にも篤くお礼申し上げたい思ふ。

平成七年四月十日

（八木　秀次）

著者略歴

一、大正三年、東京に生まれる。
一、昭和五年東京府立第四中学校四年修了、同年四月、第一高等学校文科丙類入学、「一高昭信会」に入会。
一、昭和十三年、東京帝国大学法学部法律学科卒業、第一銀行入社。
一、昭和十六年、同行を退職し同志と共に「精神科学研究所」設立、理事兼所員に就任。
一、昭和十八年、同研究所解散により退任、日特金属工業㈱入社。
一、昭和四十二年、同社常務取締役に就任。
一、昭和五十三年、同社を退く。
一、昭和三十九年より社団法人國民文化研究会監事、
一、平成七年、同会顧問。

母の智－女であることについて－

平成七年四月二十九日発行（頒価五〇〇円）

著者　加納祐五

発行所　㈳国民文化研究会

〒一〇四　東京都中央区銀座七－一〇－一八　柳瀬ビル

電話　〇三－三五七二－一五二六